

新潟県における弥生時代後期～古墳時代前期の 信濃系土器について

滝 沢 規 朗

1 はじめに

古代では、越後は北陸道、信濃は東山道に分断されつつも、上越地域と長野県北部の北信地域は強く影響を与えあい、関係性を持ち続けたとされる。このこともあって平成 28 (2016) 年地方史研究協議会の第 67 回大会において「「境」と「間」の地方史－信越国境の歴史像－」と題し、その密接な関係性がテーマとなり、様々な研究成果が提示された。筆者は事務局からの依頼により、問題提起として「弥生・古墳時代の土器の移動－上越と北信の状況」と題し、わずか 4 頁の拙文であるが弥生時代中期中葉～古墳時代前期の上越と北信の交流の様相を提示した [滝沢 2016]。主に先学の研究成果をもとに、最別時期毎の動向を示した後、北陸以西から北信への日本海ルートによるモノの流れが重視された時期は信越の交流が頻繁となるが、定型化した大型古墳が築造される時期に入ると日本海側の文物の流れがやや低調になることに伴い、両者の交流は質的に変化したと想定した。

これまでの研究成果で、弥生時代中期中葉から信濃・栗林式土器が越後に広範囲に及ぶが [笹沢 2009]、弥生時代後期～古墳時代前期の早い段階では、越後では信濃の土器が希薄になる一方で北陸北東部系土器は信濃の北部に面的に広がる。弥生時代後期～古墳時代前期初頭では信濃の北陸系土器について、越後側 [坂井 1984、川村 1996a] から、信濃側から集成や系統の検討が行われており [桐原 1959、 笹沢 浩 1988、千野 1993、前島 1993 など]、その成果を筆者なりに解釈したものである。

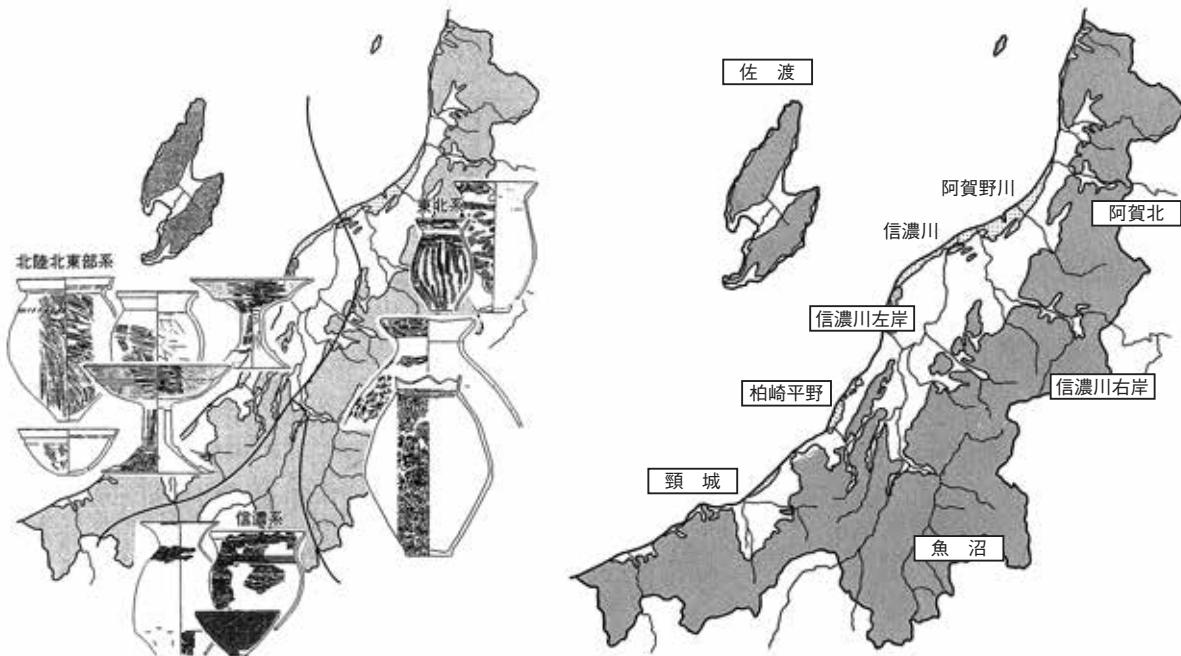
一方で、弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器については、信濃側からその存在を指摘されたもの [桐原 1980 など]、各報告書等での指摘 [滝沢 1994、相田 2014 など] や信濃の影響を指摘する論考 [春日 2001] はあっても、検討の基礎となる集成が進んでいない。そこで本稿では、新潟県内における弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器の状況を概観し、土器から信越の交流の一端を垣間見ることにしたい。

2 対象とする地域や時期等

(1) 対象地域

これまでの発掘調査成果から、新潟県でも頸城平野を越えた山間部（上越市中郷区：旧中郷村と妙高市山間部：旧妙高村・妙高高原町）、魚沼地域でも信濃川上流域の十日町市・津南町を除く地域とした。頸城山間部は上越市籠峰遺跡 [中郷村教委 2000]、妙高市小野沢西遺跡 [新潟県教委・埋文事業団 2004] などでは弥生時代後期は信濃系土器が主体で、信濃系土器分布圏とされる [笹沢 浩 2004]。後続する古墳時代も妙高市大洞原 C 遺跡 [新潟県教委・埋文事業団 1997] や上記の籠峰遺跡・小野沢西遺跡などでは信濃系土器が色濃く分布する。頸城南部の山間部は、引き続き検討の余地は残すが、大きくは北信地域と同様の土器様相を呈する可能性があるため本章では除外し、北陸系の伝播ルートを検討するため稿を改めたい。

また、魚沼地域は大きく信濃川流域と魚野川流域で土器様相が異なり、弥生後期は魚野川流域で東北系が主体となるが、信濃川流域は比較的安定して信濃の影響を受け、5 期に信濃系の影響下の中で外来系である北陸系や東海系が少量入ってくるとの指摘がある [安立 2005]。古墳時代とした 5 期前後は別途検討が必要であるが、弥生後期において頸城山間部から魚沼地域は信濃系土器分布圏と捉えた（第 1 図）。



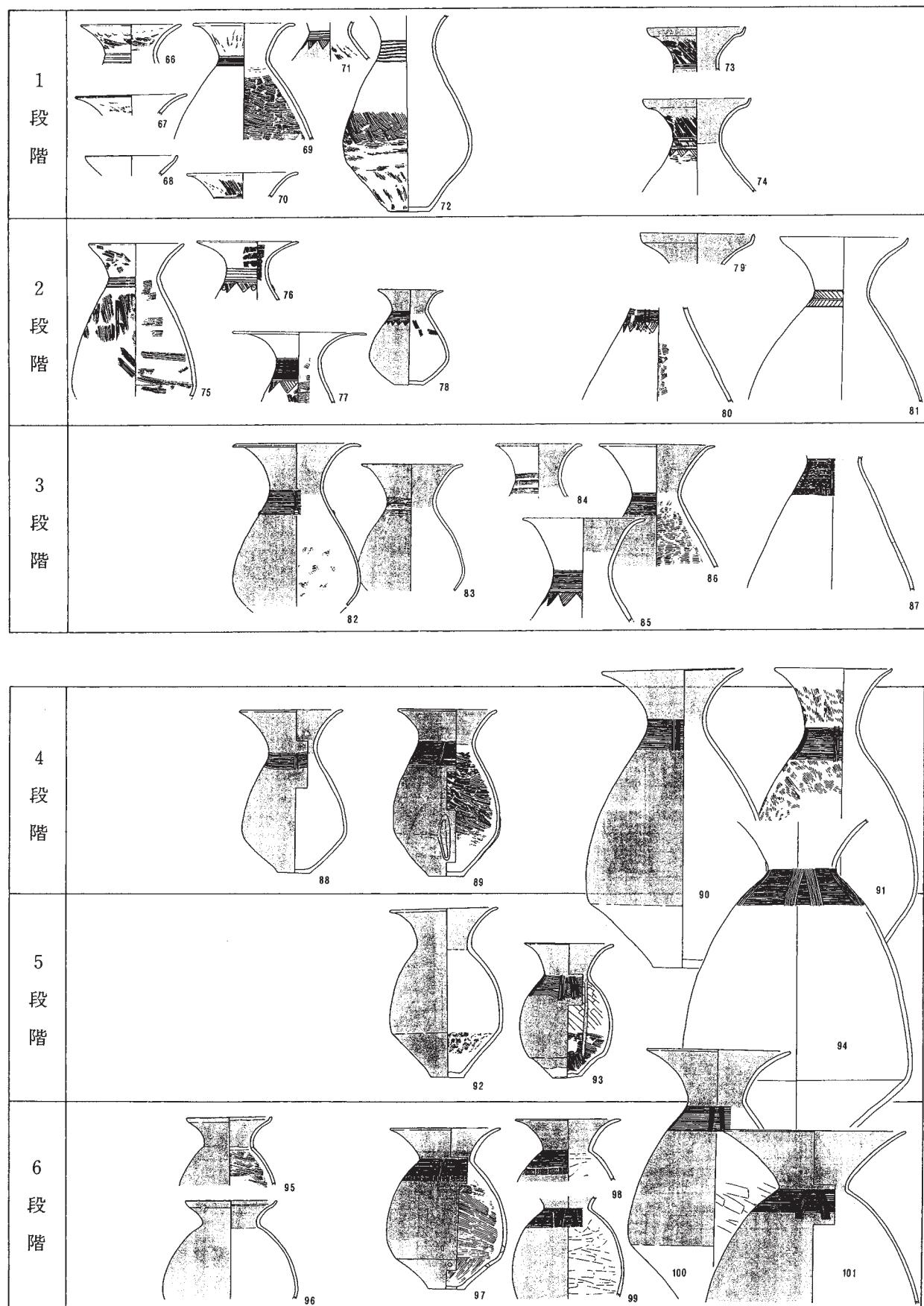
第1図 新潟県における弥生時代後期後半の土器の地域色と地域区分(土器の地域色は滝沢2009bから)

(2) 時期区分

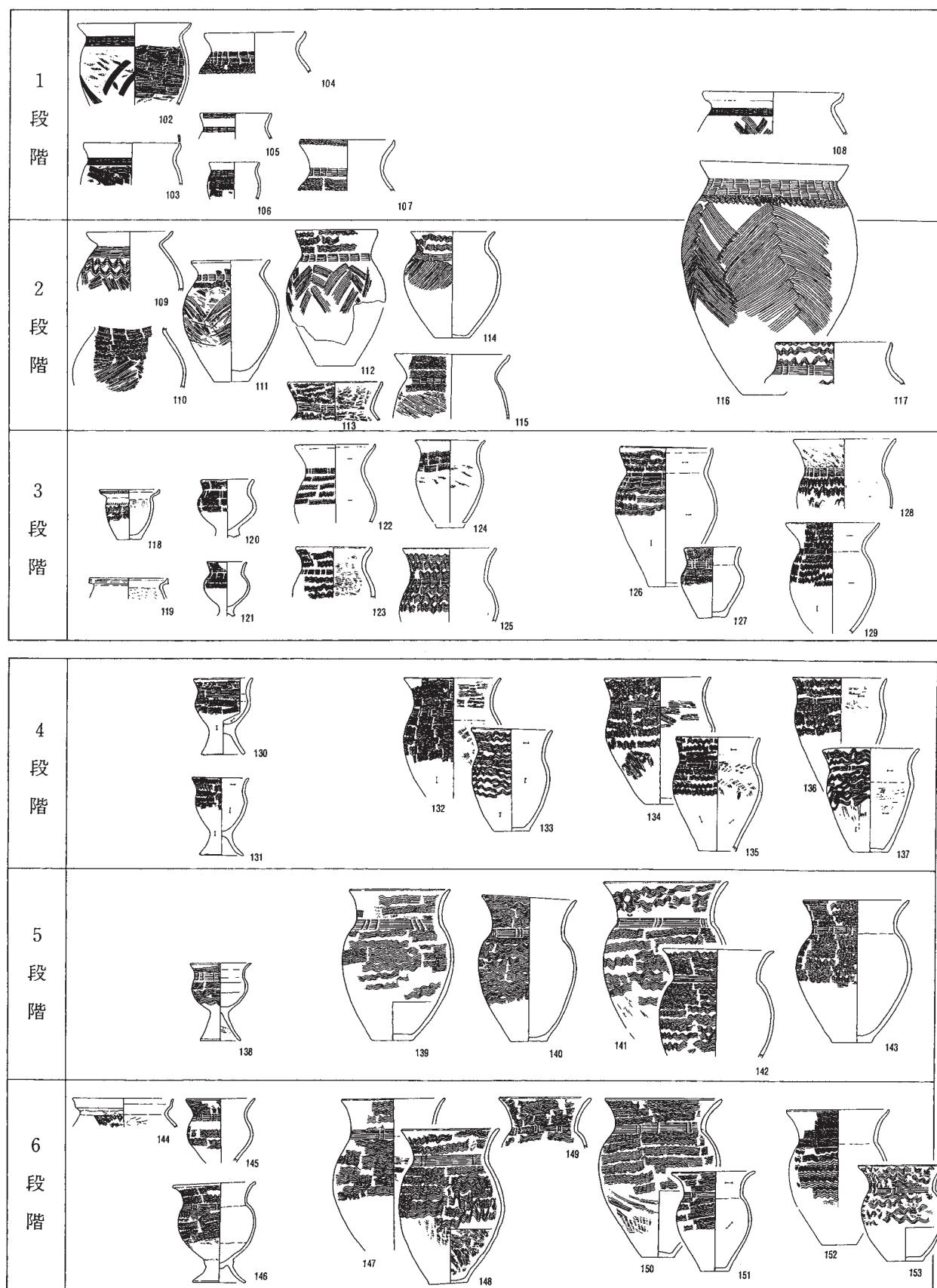
以下では断りがない限り、いわゆる新潟シンポ編年 [日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993] で示すこととする。同編年は、北陸の南加賀・漆町遺跡の編年 [田嶋 1986] で示された群を期に置き換えたもので、東海・廻間編年 [赤塚 1990] とともに広域編年として使用されている。1993年段階では廻間編年はじめ、他地域編年との併行関係について十分な議論が行われたとは言い難く、新潟シンポ編年設定後に田嶋明人氏が併行関係を追求している [田嶋 2008・2009 など]。

新潟県の土器編年・器種分類は、筆者の考えで示す [滝沢 2010b・2012a・2019 など]。一方で、信濃系の土器編年等は充実した研究の蓄積 [笹沢浩 1970、青木和 1984、千野 1989 など] がある中で、弥生時代後期～古墳時代前期の幅広い時期を対象とした本稿との整合性を図るために、報告書で詳細な検討が行われている青木一男氏の分類や時期比定 [青木一 1997・1998・1999] を主に用いる (第2～4図など)。青木一男氏は、弥生時代後期～古墳時代前期を6期区分し、それぞれ各期を段階・様相として区分する。様式名としては、1期1～2段階を吉田式、1期3～3期6段階までを箱清水式、4期を御屋敷式とし、外来系土器により在地の土器様相が変質した5・6期は様式名を与えていない [青木 1998]。その後、仮として様式名称を変更しているが、ここでは青木 1998 までの様式名称を用いる¹⁾。

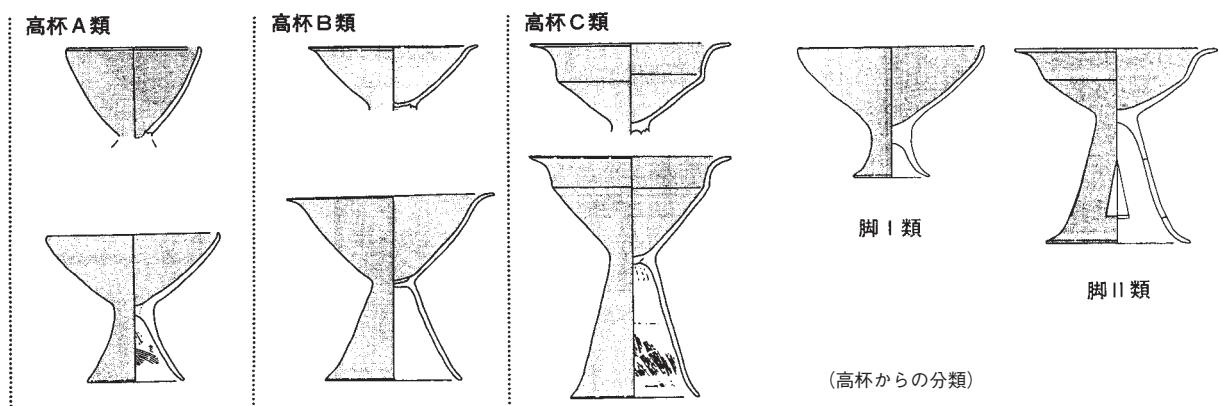
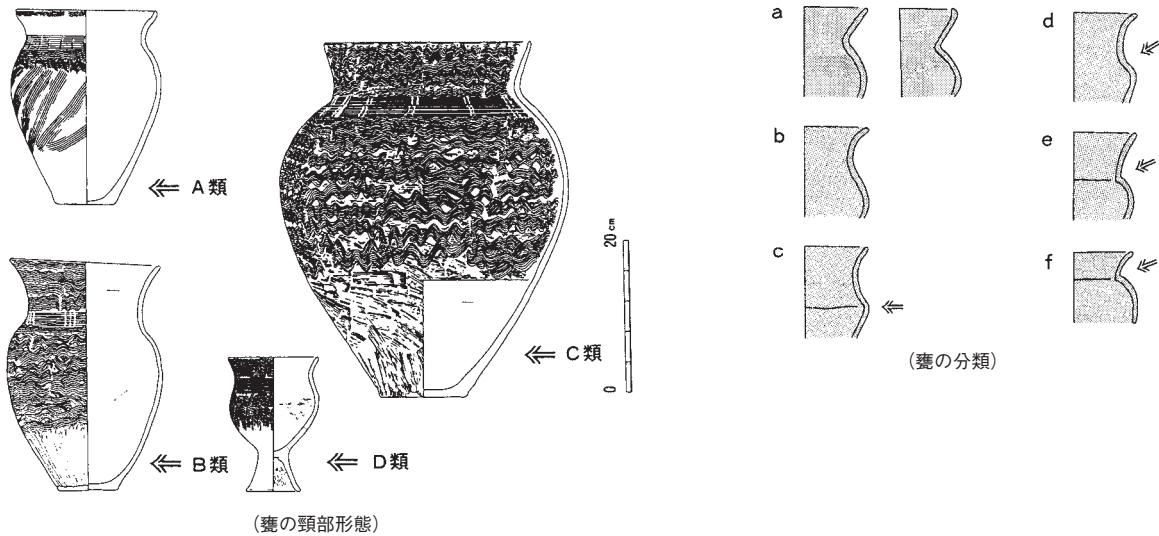
北陸系と信濃系土器の併行関係も数多くの論考があり [千野 1993、土屋 1993、森本 2006 など]、信濃の箱清水式は北陸の法仏式・月影式 (本稿の2～4期)、信濃の御屋敷式は白江式 (5・6期)、青木5・6期は新潟シンポ編年7～11期に併行するとされてきた。近年では、田嶋明人氏によって信濃の編年基準資料に共伴する北陸系土器等の年代が整理され、これまでとは異なる併行関係を提示された [田嶋 2009b]。田嶋氏自体の修正・白江式 [田嶋 2006] の観点を含め、特に新潟シンポ編年7～10期あたりの理解で異なる部分が少なくない。筆者は、信濃系土器の編年については理解が及んでいないが、屈折脚高杯の年代を通して、9・10期あたりの理解も変更してきたこともあり、基本的に田嶋 2009b の指摘を重視し、第1表に従って検討を行い、筆者なりの編年観で補足を行う。



第2図 長野盆地における後期土器編年1 (S=1/12) (青木1998から)



第3図 長野盆地における後期土器編年2 (S=1/12) (青木1998から)



第4図 土器の分類等(青木1998から)

第1表 編年対応表

本稿の時間軸	時代・時期	北信		越後・佐渡 滝沢2010~ 2012・2017	北陸南西部			東海 赤塚1992ほか	畿内 西村2008	
		青木1998				V-1	V-2			
1 弥生・後期前半	4期	1期 2期	1段階 2段階 3段階	吉田式 箱清水式 御屋敷式	1群 2群 3群 4群 5群 6群	V-1 V-2 V-3		八王子古宮 山中1 法仏 月影 廻間 I 廻間 II 古府クルビ	西村2008	
			4段階			2-1 2-2		山中2		
			5段階			3-1 3-2				
2 弥生・後期後半			6段階			4群			庄内式 古段階 中段階 新段階	
						5群				
3 古墳・早期	5期					6群			古段階古相 中段階古相 中段階中相 中段階新相	
						7群				
4 古墳・前期	6期					8群			布留式	
						9群	高畠			
5 古墳・中期	7期					10群			松河戸 I	
						11群				
6						12群			松河戸 II	
7										
8										
9										
10										
11										
12										

3 新潟県内の信濃系土器出土遺跡

(1) 出土遺跡（第5・6図）

① 新潟市古津八幡山遺跡 [新津市教委 2004・新潟市教委 2014]

弥生時代後期前葉～末葉の高地性環濠集落で、信濃系は計3点出土している（第5図1～3）。15～19次調査1T SK1601上層出土の1は、青木分類のD類に相当すると考える甕である。北陸系の有段壺と共に伴する。報告書では頸部下端に簾状文が施された後、頸部・胴部には櫛描波状文が施文されており、施文手法・器面調整は中部高地系そのものであるが、形態は一般的ではなく、変容している可能性が指摘されている〔新潟市教委 2014〕。時期は御屋敷式段階とされ、4～5期頃に位置付けられている。2は9T包含層出土の胴の張った甕で、文様構成・形態は1に近く、信濃・御屋敷式段階（4～5期以降）とされている。3は11～14次調査16T包含層出土の青木分類D類であり、胴の張った甕の頸部～胴部片で、櫛描波状文が施されている。同トレンチから2期頃の北陸系・東北系土器の小破片が出土している。

② 新潟市（旧卷町）大沢遺跡 [卷町 1994]

新潟大学による4次にわたる調査、卷町教育委員会による調査が行われ、弥生時代1～5期頃の遺構・遺物が出土している。卷町史〔卷町 1994〕に掲載された図を提示した（第5図4）。

信濃系土器は、四隅切れの方形周溝墓北西ブリッジから出土している。頸部がやや直立するもので、青木分類BⅡ・Ⅲ類の甕に相当すると思われる。簾状文が不定間隔止めとなり、波状文も粗く波高が大きいことから御屋敷式段階の可能性が指摘されている〔荒木 1994〕。

③ 長岡市（旧和島村）奈良崎遺跡 [県教委・埋文事業団 2002]

弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡である。箱清水系甕（報文は釜）として口縁部残存率計測法で1.5/36、破片数5とされており、包含層出土が2点図示されている（第5図5・6）。細片のため時期比定は困難である。

④ 刈羽村西谷遺跡 [刈羽村教委 1992]

独立低丘陵上の環濠集落直下の水田が確認された包含層から1点出土している（第5図7）。比較的狭い範囲に広がる包含層V a-2層出土で、青木分類のBⅡ・Ⅲ類に相当すると考える。口縁部内面では胴部と頸部境は比較的明瞭であり、成形技法e類に相当すると考える。同層出土の北陸北東部系土器は2期（-2）と考えており、青木4段階に相当すると考える。この他、簾状文や櫛描波状文が施された土器がそれぞれ出土しているが、細片のため、時期・系統の比定は困難である。

⑤ 柏崎市西岩野遺跡 [柏崎市教委 2019]

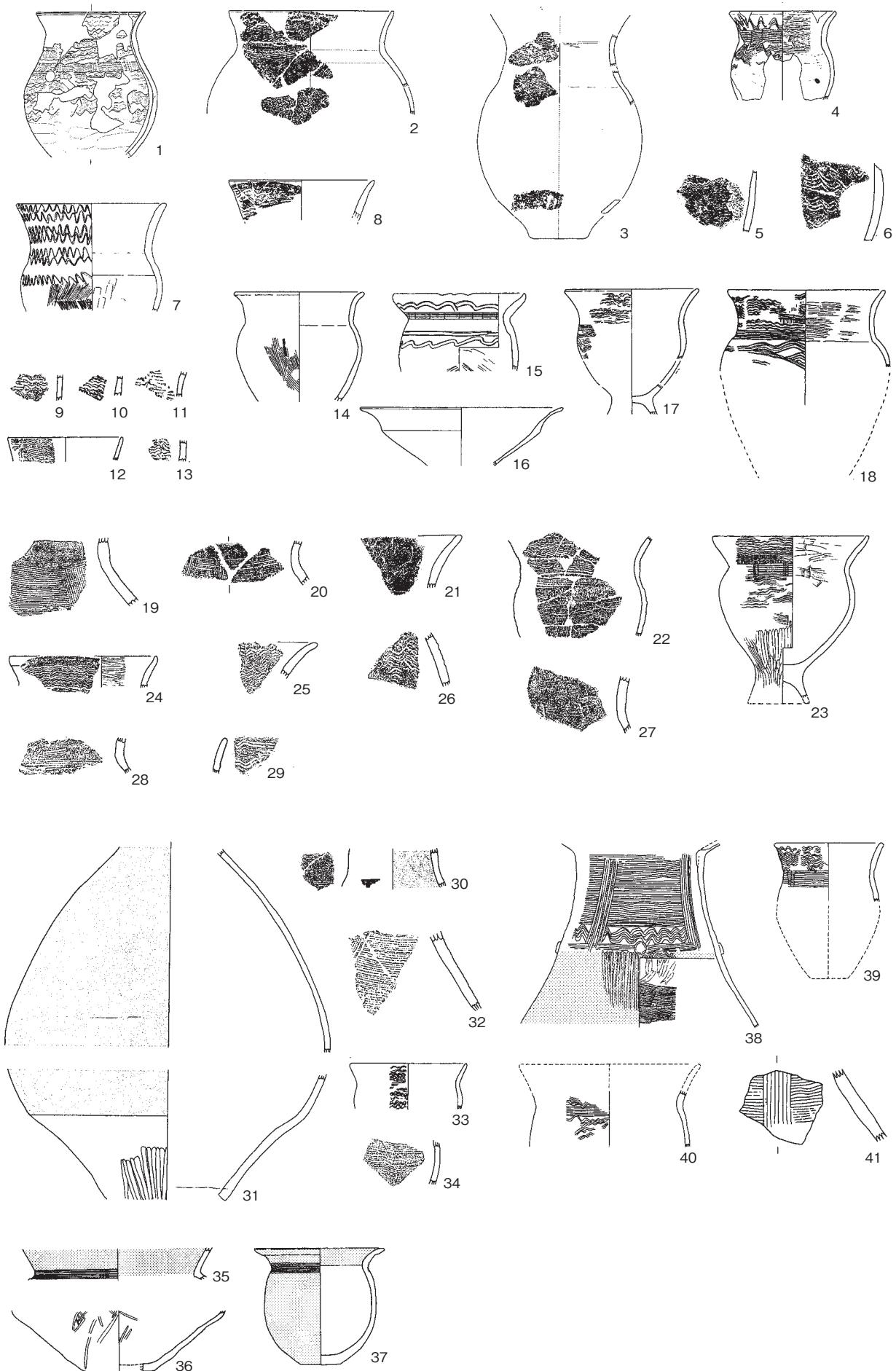
周辺との比高約30mの丘陵上に営まれた弥生時代後期を主体とする環濠集落と考える。方形の掘方をもつ大型掘立柱建物の柱穴から、櫛描波状文が施され口縁部小破片が1点出土している（第5図8）。小破片のため時期比定は困難であるが、周辺から出土している土器から2期を中心に若干新しくなる可能性を含むものと考える。

⑥ 上越市木崎山遺跡 [柿崎町 2004]

砂丘上に位置する古代・中世の遺跡として著名であるが、弥生時代の土器が若干出土しており、櫛描波状文が施された土器5点が出土している（第5図9～13）。同一個体で箱清水式とされる。同遺跡から出土している北陸北東部系土器はおおむね2期の所産と考える。

⑦ 上越市（旧三和村）東広井遺跡 [三和村教委 2003]

沖積地に立地する古墳時代前期（5～9期）の集落跡である。柱穴群2とされる5～7期程の土器とと



第5図 新潟県の信濃系土器1 (断面実測図と12:S=1/4、その他:S=1/6)

もに1点出土している（第5図14）。狭小な調査範囲のため判然としないが、周囲に溝が巡るエリアで広溝式建物の可能性もある。当期の北陸北東部系土器とは異質で、文様は欠くものの、口縁部が長く、胴部最大径が口径を下回る点などから信濃系とした。御屋敷式段階のものと考える。

⑧ 子安遺跡〔笛沢・滝沢 2002、上越市教委 2009〕

沖積地に位置する大規模集落である。複数年度にわたり広範囲な調査が行われているが、平成5～7（1993～1995）年の調査ではSX598出土の甕がある（第5図15）。報告文では施文方法から東北系としたが、形態から信濃系と改めたい。口縁部と胴部の境界には簾状は施され、口縁部には櫛描文が、胴部上位には2条の平行沈線とその直下に櫛描波状文が施されている。口縁部は長くなく、口縁部と胴部の境界は明瞭である。青木氏のB IV類か。共伴する土器は北陸北東部系で、2～2期の基準資料と考えている。

上越市教委2009では、細片のため断定は難しいが、青木分類・高杯B類の口縁部がある（第5図16）。箱清水系の高杯は、北陸系高杯を模倣することで成立したとされることから差異は微妙であるが、有段部からの立ち上がりから箱清水系の高杯と考える。共伴する土器は2期である。

⑨ 上越市裏山遺跡〔県教委・埋文事業団 2000〕

周辺との比高約80mの丘陵上に位置する高地性環濠集落である。丘陵上にある幅約50cm、長さ6.8mの1号溝から台付甕1点が出土しており（第5図17）、青木分類D IV～V類に相当する。同遺構内出土土器から2期を中心とした時期のものと考える。

⑩ 上越市前田遺跡〔上越市教委 1999〕

沖積地の微高地に位置する5～10期程まで続く集落跡である。平成9（1997）年度の調査でSX4とされた幅1m前後、深さ20～40cm程の弧状を呈する溝状の遺構から1点出土している（第5図18）。隣接するSX（性格不明）とされる遺構とともに、周溝を持つ建物の溝の可能性もある。信濃系土器は青木分類B V類で、内面の胴部と頸部境は明瞭である。共伴して器台の脚部と思われるものが出土しているが、廃棄の同時性は明確でない。口縁部が長く、頸部と胴部の境界が明瞭なことから御屋敷式段階（5期以降）の所産と考える。

⑪ 釜蓋遺跡〔上越市教委 2008・2013・2015〕

扇状地に営まれた4～5期の環濠集落で、1～2期、古墳時代中期の土器を含む。複数冊の報告書が刊行されているので、以下では報告書毎に信濃系土器の状況を確認する。

2008年度報告では、1号環濠下層から壺の胴部上位片（第5図19）、甕口縁部片（21）、1・2号環濠上層から甕（20）、SX34から甕（22）、SX62から台付甕（23）、SD65から甕口縁部破片（24・25）・胴部片（26）、包含層から頸部片（27・28）が出土している。報告書では胎土の記載もあり、北陸的（19・20・23・24・28）、妙高以南の山岳方面（21・22・25・27）とされる。

このうち比較的残存率が高い土器では、22の甕は口縁部が長く、胴部の張り出しが強いことから青木6段階を中心とした土器と考える。23の台付甕は口縁部の張り出しが弱い点から青木4段階頃の所産と考える。これは同一遺構から出土している有段鉢の年代とも矛盾しない。この他は細片のため時期比定は困難であるが、4～5期を中心とした年代を想定したい。

2013年度報告では1辺10m程の大型建物であるSI83覆土1層から甕口縁部片が1点出土している（第5図29）。時期比定は困難であるが、北陸北東部系土器は4期と考える。

⑫ 上越市今泉釜蓋遺跡〔上越市教委 2010〕

釜蓋遺跡の200m程南側の扇状地に位置する。弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓が16基検出

されており、遺跡の位置から釜蓋遺跡を営んだ集団の墓域と考えたいが、出土土器の年代は釜蓋遺跡の主体的時期となる4～5期のものは極端に少ない傾向にある。信濃系の出土点数は5点と多い。4号方形周溝墓では壺頸部片（第5図30）が、長さ・幅が3m弱のSX28から壺の胴部上位～下位が検出されており（31）、報告書では土器棺の可能性があるとされている。この他に、SX67では3～4期とされる壺（32）、遺構外では甕の口縁部～胴部上位片（33）や甕胴部片（34）が検出されている。この他に台付甕が3点出土しているが、信濃系かは明確でない。

細片は時期比定が困難であるが、4号方形周溝墓は他の北陸北東部系土器の年代から2期前半、SX28の31は胴部下位の屈曲から青木氏の5～6段階、33は青木氏の4段階を中心とした時期と考える。

⑬斐太遺跡〔滝沢1994・斐太歴史の里調査団ほか2005・2006〕

広大な面積を誇る2～3期の高地性環濠集落で、環濠埋没後の5期まで建物が確認されている。5期の基準資料と考える上ノ平・矢代山地区24号住では、壺（第5図35～37）が検出されている。35は胴部下位の屈曲が著しいことから青木4段階以降、37の小型壺は北信での類例を検索できていないが、中信に類例をもつ。いずれも北陸北東部系土器と年代観に矛盾はない。

矢代山B地区では土坑墓の可能性があるSK23から壺（38）が、環濠から甕が2点（39・40）、壺が1点（41）出土している。SK23の壺は胴部上半に櫛描直線文や波状文により文様帯が形成され、垂下文により2条1単位のT字文が施され、ボタン形の円形浮文が塗布されている。箱清水系または樽式の影響が推測されている。北陸北東部系土器は2～3期である。

環濠出土のうち37・38は部分破片のため時期は決し難いが、37は青木分類BIV類で、口縁部の長さ等から青木4段階を中心としてよければ、他の土器とも大きな矛盾はない。

⑭上百々遺跡〔新井市教委1985〕

沖積段丘に位置する古墳時代前期（6～7期）主体の遺跡で、弥生中期～後期の土器が若干出土している。信濃系の土器は大型広口壺1点（第6図42）で、胴部は無文である。胴部と口頸部の屈曲は明瞭であることなどから、他の北陸北東部系土器の年代観とは矛盾しない。

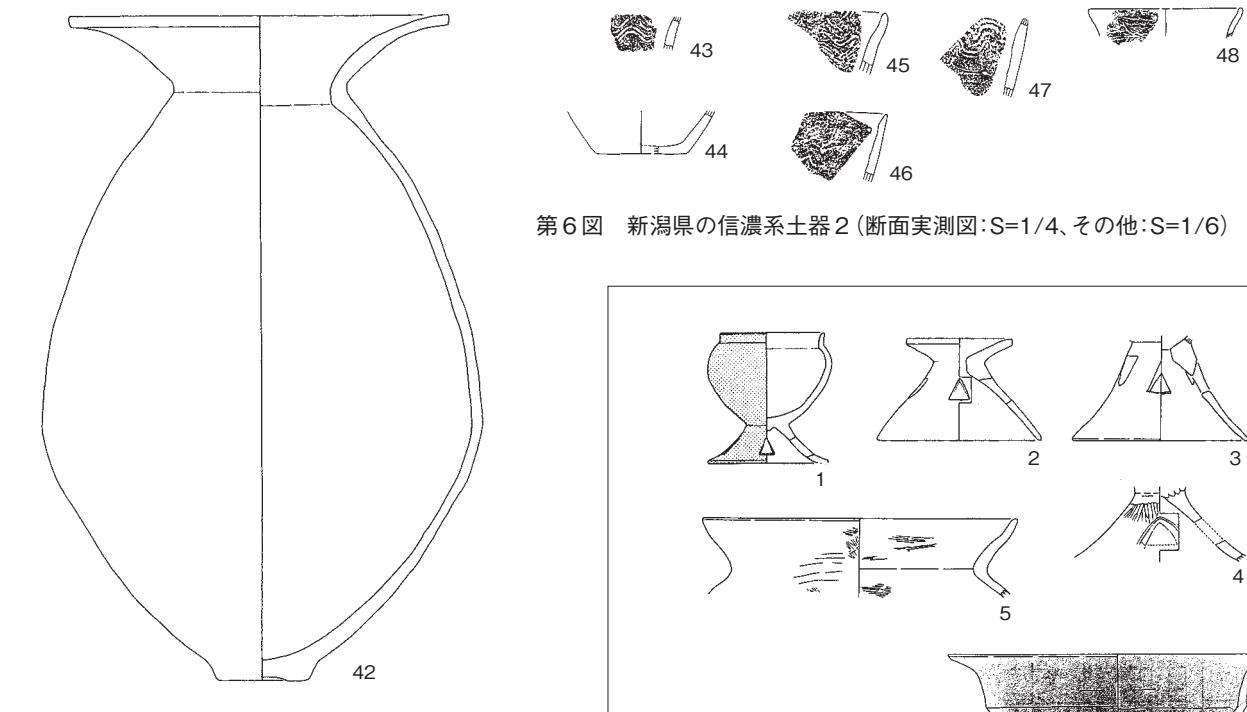
⑮六反田南遺跡〔県教委ほか2008・2010・2016〕

古墳時代前期を中心とする集落である。複数年に及ぶ調査でそれぞれ報告書が刊行されており、計6点確認できる。2008年度報告では5～6期主体のSD196から甕と思われる口縁部片（第6図43）が検出されている。また文様を欠くが、胎土から信濃系とされる底部（44）がある。いずれも年代は決し難いが5～6期頃となろうか。

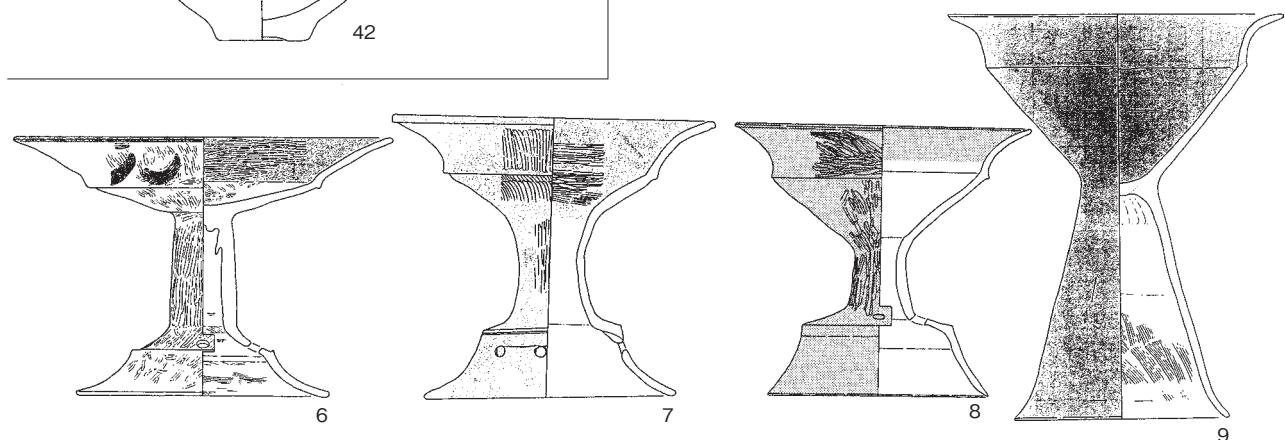
2010年度報告では、2期頃が主体と考えるSD605から甕が3点出土している（45～47）。破片資料のため年代は決し難いが2期頃を推定したい。2016年度報告では共伴資料を欠くが、SB7646-P7547から甕口縁部片が1点検出されている（46）。遺構の年代から5～6期を想定したい。

（2）出土遺跡の分布と時期的な傾向

ここまで、信濃系土器の県内での出土状況を概観してきたが、県北部の阿賀北と佐渡を除く15遺跡で50点弱が確認されている。県境を接する頸城が最も多く、北に向かうに従い数量が減じている。信濃系の土器は櫛描文様が特徴となるが、残存率の高い個体から文様を欠くものでも信濃系と認定したものもある。器種は甕が圧倒的に多い。少量ながら確認されている壺や高杯でも有段のC類が若干確認されているが、出土遺跡はいずれも頸城である。鉢は確認できない。細片の場合に時期比定が困難であるが、廃棄の同時性が確認できる遺構出土資料や、包含層出土であっても周囲から出土している北陸北東部系土器を頼



第6図 新潟県の信濃系土器2(断面実測図:S=1/4、その他:S=1/6)



第7図 部分的要素が認められるもの(S=1/6)

りに時期別の動向を概観する。ただし、前者の資料は決して多くないため多くに課題を残す。

A 1～3期（吉田式、箱清水式3期4・5段階あたり）

信濃系は1期のいわゆる吉田式の明確な例を欠き、2期の箱清水式からとなる。箱清水式でも青木編年3期4・5段階あたりのものは、北は信濃川下流の新潟市古津八幡山遺跡、柏崎平野・西谷遺跡や西岩野遺跡、隣接する頸城では上越市の木崎山遺跡・裏山遺跡・子安遺跡・今泉釜蓋遺跡、妙高市斐太遺跡、糸魚川市六反田南遺跡など広範囲に及ぶ。時期比定が困難ながら信濃川中流域（左岸）の長岡市奈良崎遺跡も当期とすれば、更に範囲は広大となる。遺跡数は多いものの、出土点数は妙高市斐太遺跡や糸魚川市六反田南遺跡などでやや多い点や、頸城でも高田平野で甕以外の器種が確認できるが、出土点数は県内他地域との際立った差は認め難い。

B 4～6（7）期（箱清水式3期6段階あたりから御屋敷式）

北陸北東部系をはじめ他地域の土器を含め一つの画期となる4期は、集落の存続時期でも一つの節目となる。県内では3期に高地性環濠集落の環濠が埋没し、新たに平地の環濠集落が出現するが、当期以降の信濃系は信濃川下流の新潟市古津八幡山遺跡で確認されているほか、同左岸の新潟市大沢遺跡例が当期としても、その他は頸城に限定されるようである。

4～5期の上越市釜蓋遺跡では県内最多となる10点近くが出土しており、他遺跡を圧倒する。隣接する上越市今泉釜蓋遺跡・前田遺跡、妙高市斐太遺跡とともに主体的な分布域となる。糸魚川市六反田南遺跡でも3点程が確認されているが、全体の出土量からすれば、北陸北東部系との数量比は、2～3期と変わらない状況となる。また、櫛描文は欠くものの器形から信濃系と判断した頸城東部の東広井遺跡や妙高市上百々遺跡で確認されている以外は明確ではない。

4期以降は頸城が分布の主体となる。斐太遺跡群周辺での出土量が際立ち、6期程までは確認できる。一方で、信越国境付近の頸城・高田平野東部や、頸城・糸魚川市の拠点集落である六反田南遺跡以外は数量が極めて少なくなる。

C 部分的な要素として受容している可能性があるもの（第7図）

以上が器形に加え文様からの検索であったが、信濃的要素の一部分を取り入れた考えたいものが定量確認できる。1点目は、箱清水式高杯の変容した受容である。北陸北東部系の高杯・器台は基本的に有段部の増長として理解しており[滝沢2010b]、典型例を第7図6・7で示した。上越市市下馬場遺跡4号堅穴[新潟県教委・埋文事業団2005]出土の器台（第7図8）は2～3期の所産と考えているが、口縁部の身が深く、このような事例は、北陸北東部系の高杯・器台では異質である。器種が異なるが、口縁部の身が深い事例は箱清水式の高杯（第7図9）の部分的な引用と考えたい。

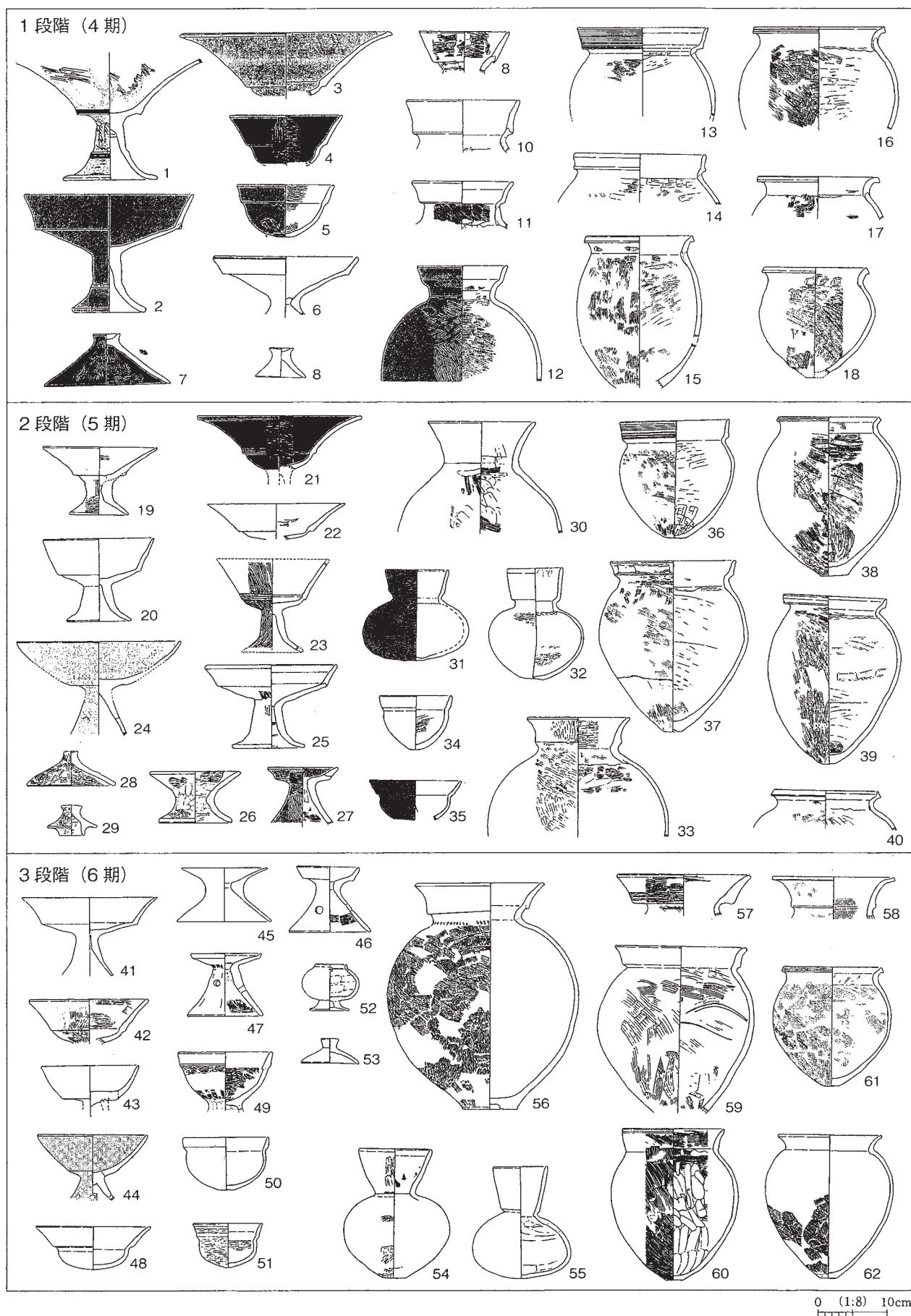
次に、以前にも触れたが脚部の三角形透孔である[滝沢2008]。頸城・妙高市斐太遺跡上ノ平24号住居[滝沢1994]の鉢（第7図1）、遠く離れて阿賀北・新発田市野中土手付遺跡[加治川村教委2004、新潟県教委・埋文事業団2006b]（第7図2・4）や新潟市正尺C遺跡[新潟県教委・埋文事業団2006c]（第7図3）の器台などで確認されている。三角形透孔の出自を十分に理解していないが、在地の土器属性からは出現するものではない。器種は器台や高杯であっても箱清水式の系譜を引くものではないが（第7図下段）、現状では信濃の要素のみ取り入れられたものと考えたい。

また、口縁部の処理等で信濃の要素を取り入れた可能性のある甕がある。筆者がかつて県内の甕を分類して千種甕に含めないとした口縁部に面を持たないⅢ類のうち、口縁部が内湾するⅢf類である[滝沢2005b]。数量は少なく、時期的にも限られるもので6期とした新潟市緒立遺跡C地区SI164[黒崎町教委1994]の甕である（第7図5）。口縁部は信濃系ほど長くないが、長野県鶴前遺跡でⅡ類とされたもの[鶴田1994]に類似する。在地の土器属性からの出現が困難と考える要素であり、引き続き検索を続けたい。

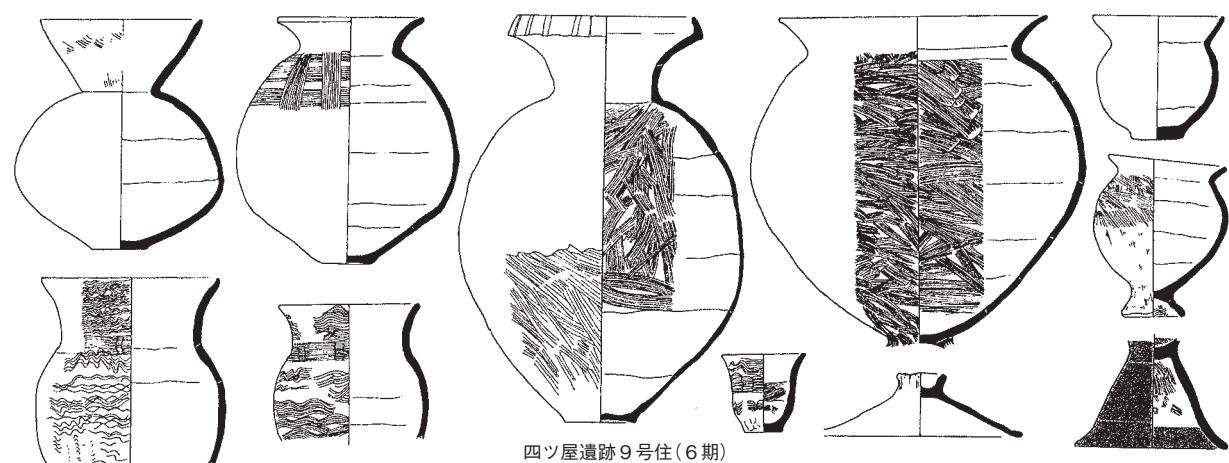
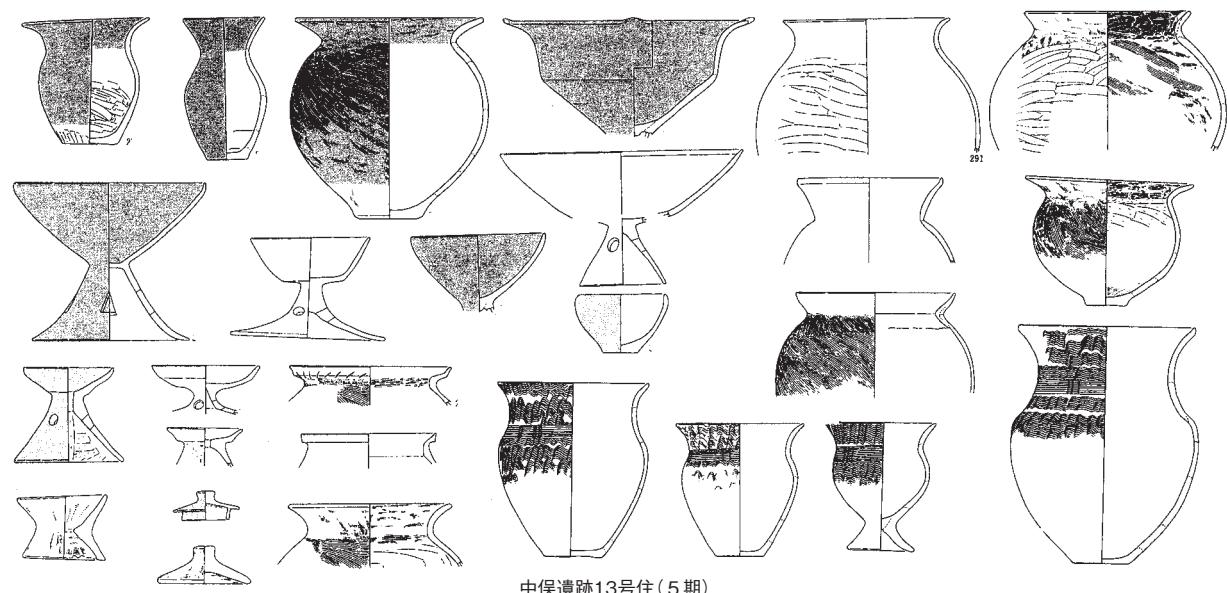
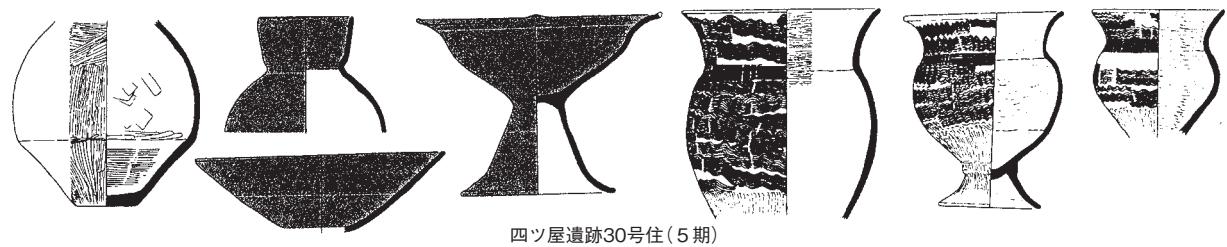
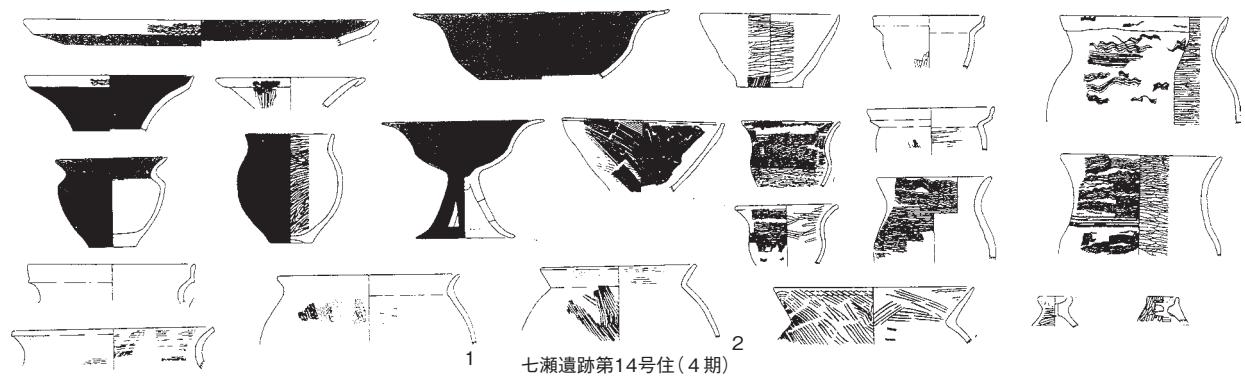
D 御屋敷式終末から北信6期あたり（7～9期）

田嶋明人氏の併行関係[田嶋2009b]に従えば、北信・青木4期後半～5期（様相1～3）に相当する（第1表）。青木一男氏の4期の御屋敷式（5～7期）は、中部高地型の壺・甕・高杯が型式変化し、中部高地型に系譜を持たない新出系の器種の出現、5期（8～9期）は4期に参入した壺・甕・高杯の系譜を引く器種により弥生後期タイプの中部高地型から古墳時代前期型に転換し、中部高地型櫛描文土器が姿を消す段階、6期（10期）は屈折脚高杯の出現を指標とする[青木1997]。青木氏の編年で5期とされた土器の一部と頸城の4～10期の編年案を第8～12図に掲載した。

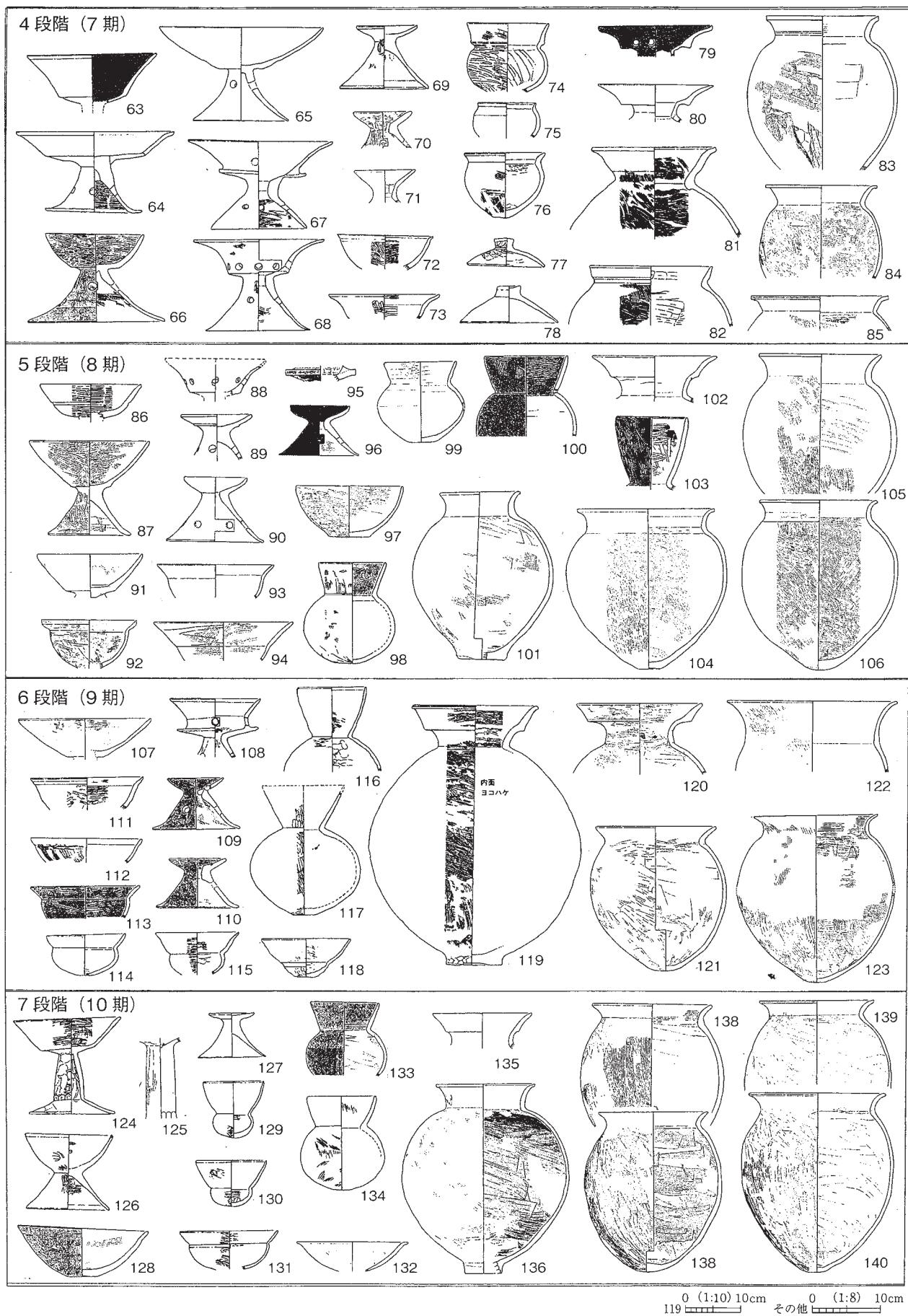
在地の様相を残しながらも古墳前期型に変換するため、頸城の土器との違いは新出系の器種の受容と在地化の過程での変容を除くと、当期の信濃系を捉える作業は筆者にはできていない。青木氏は小型精製土器群定着期（7～8期か）の甕は、布留甕はおろか、S字状口縁台付甕C類は特殊例であり、弥生後期の中部高地型櫛描文甕とは形態、調整が異なる「ハケ調整く字甕」が日常甕として定着するとし、「中部高地型櫛描文系甕」から転換した新たな在来系甕として評価した[青木1998]。青木氏の北信5期は、信濃



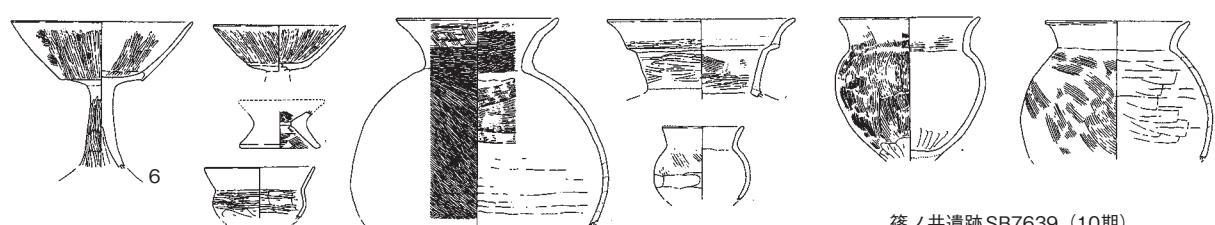
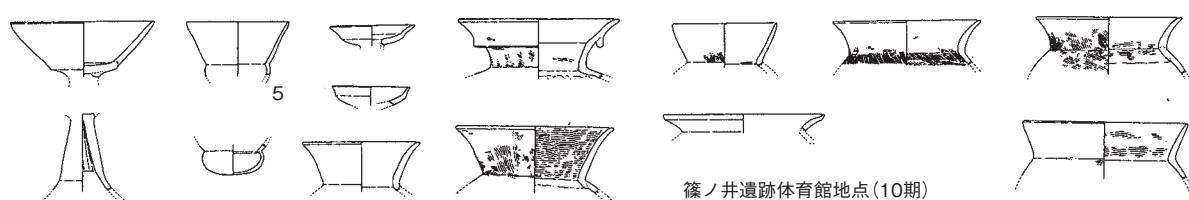
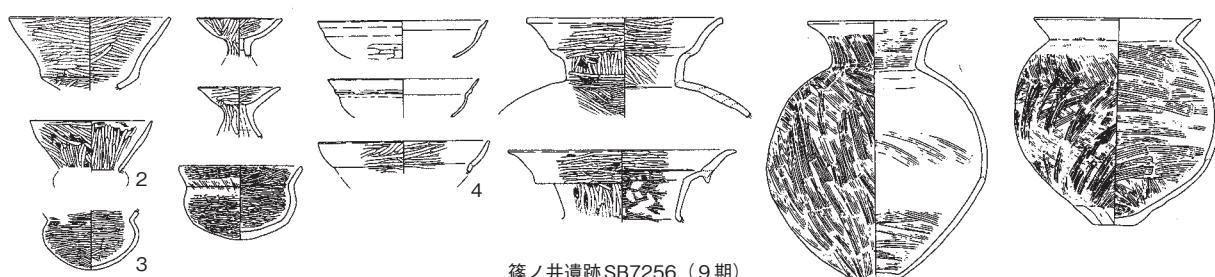
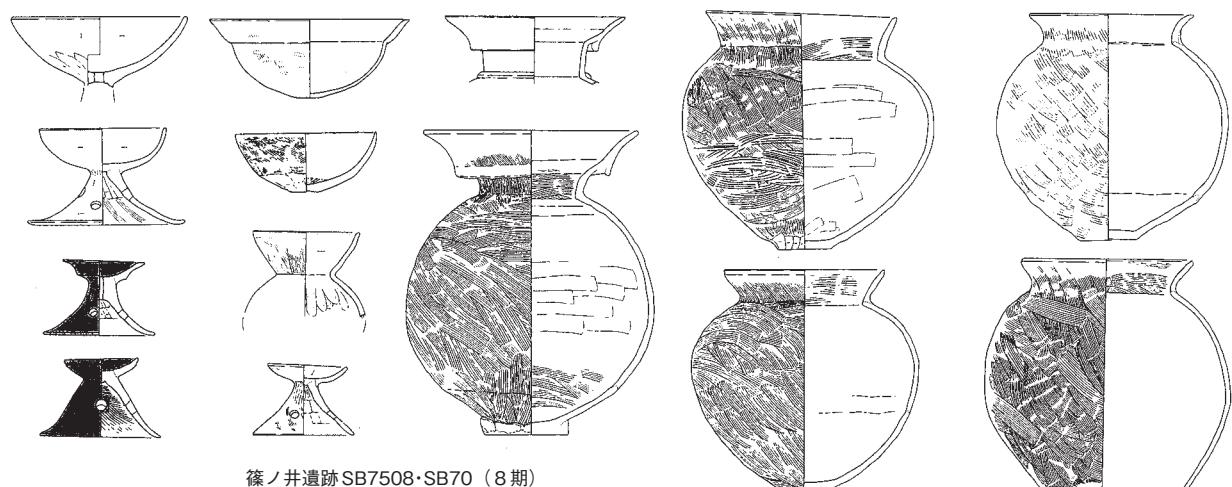
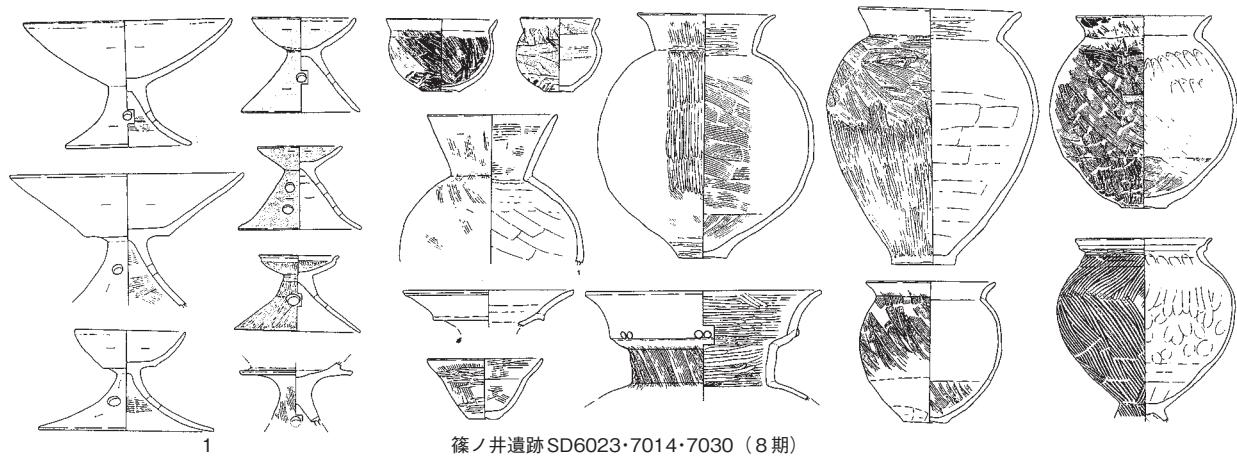
第8図 頸城における土器の変遷1 (滝沢2019b から)



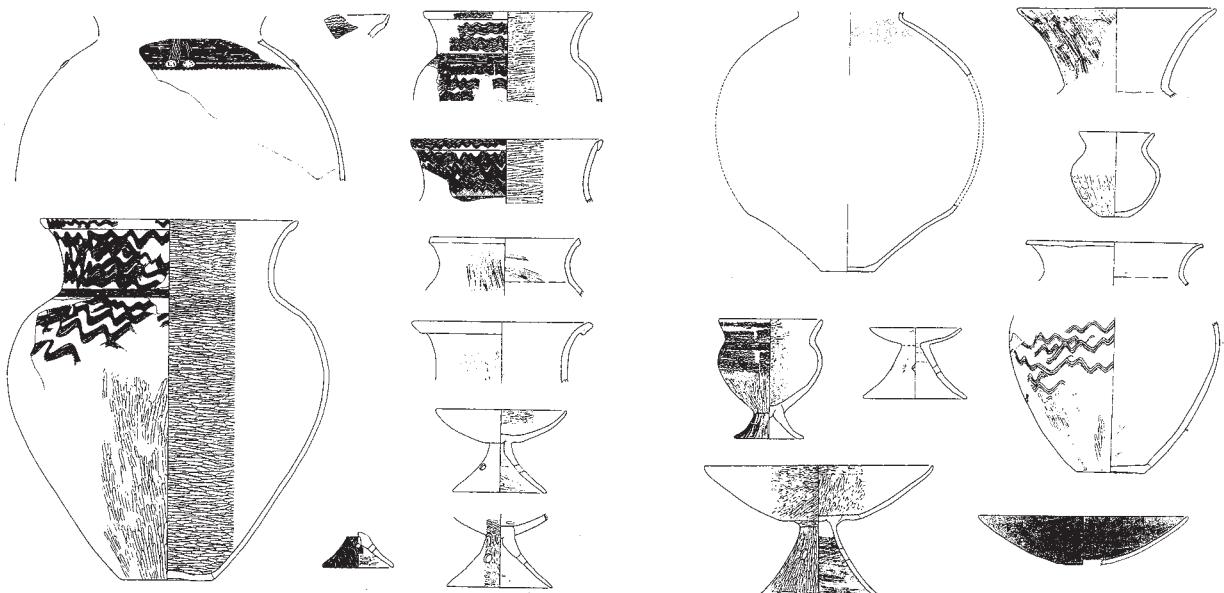
第9図 北信における土器の変遷1 (S=1/8)



第10図 頸城における土器の変遷2 (滝沢2019bから)

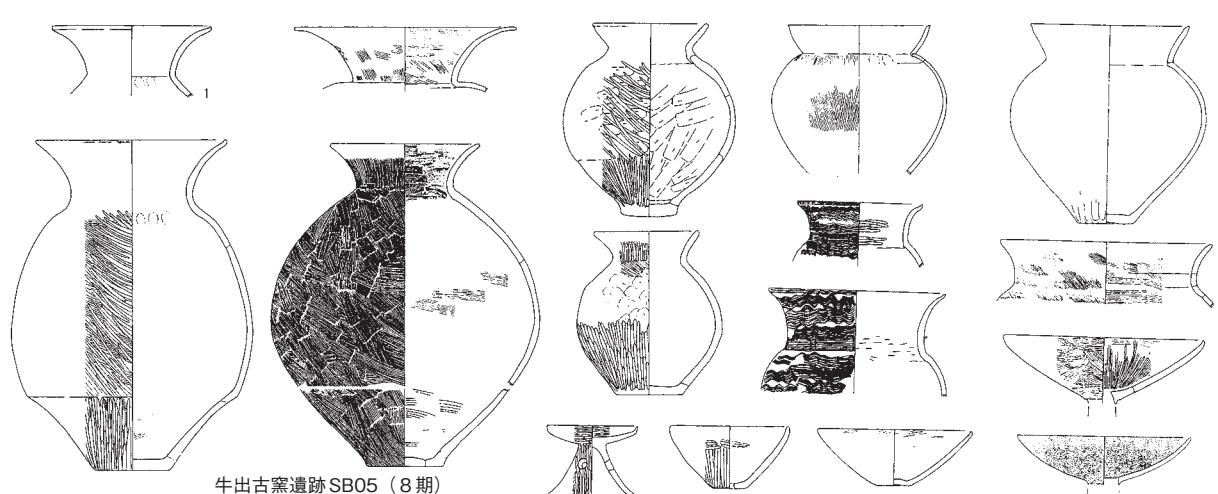


第11図 北信における土器の変遷2 (S=1/8)

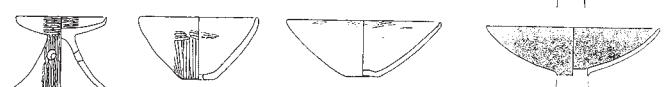


牛出古窯遺跡 SB10 (7期)

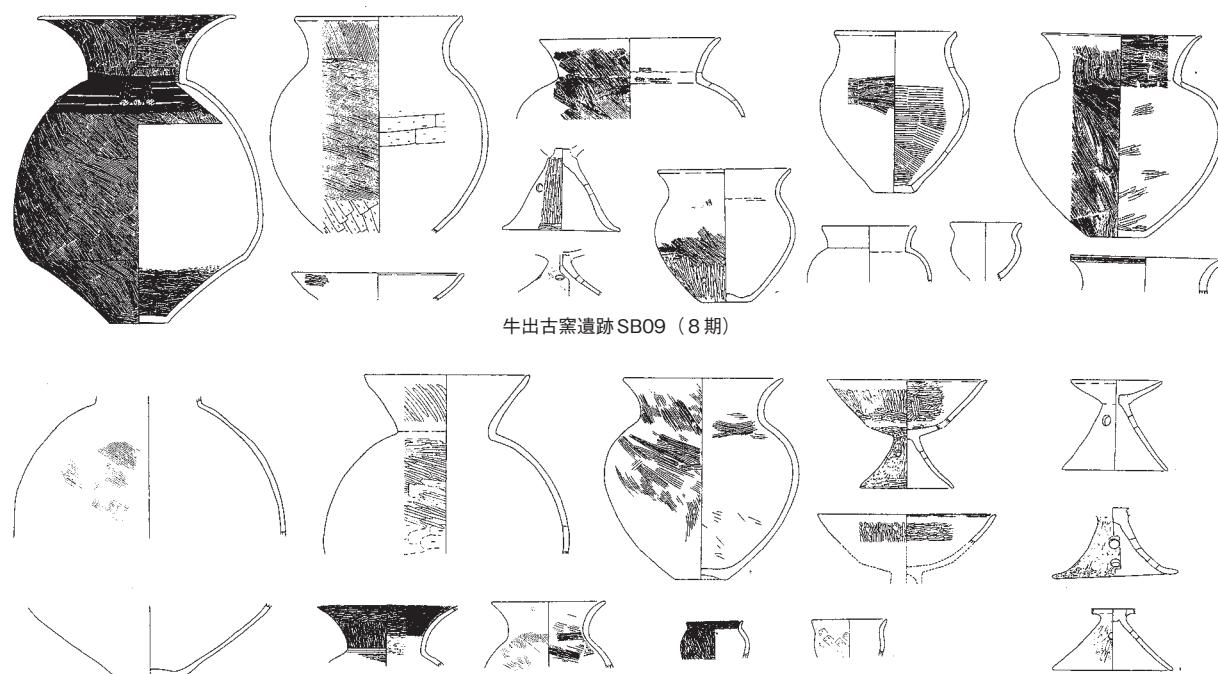
牛出古窯遺跡 SB06 (7期)



牛出古窯遺跡 SB05 (8期)



牛出古窯遺跡 SB09 (8期)



牛出古窯遺跡 SB06・SB03 (9期)

第12図 北信における土器の変遷3 (S=1/8)

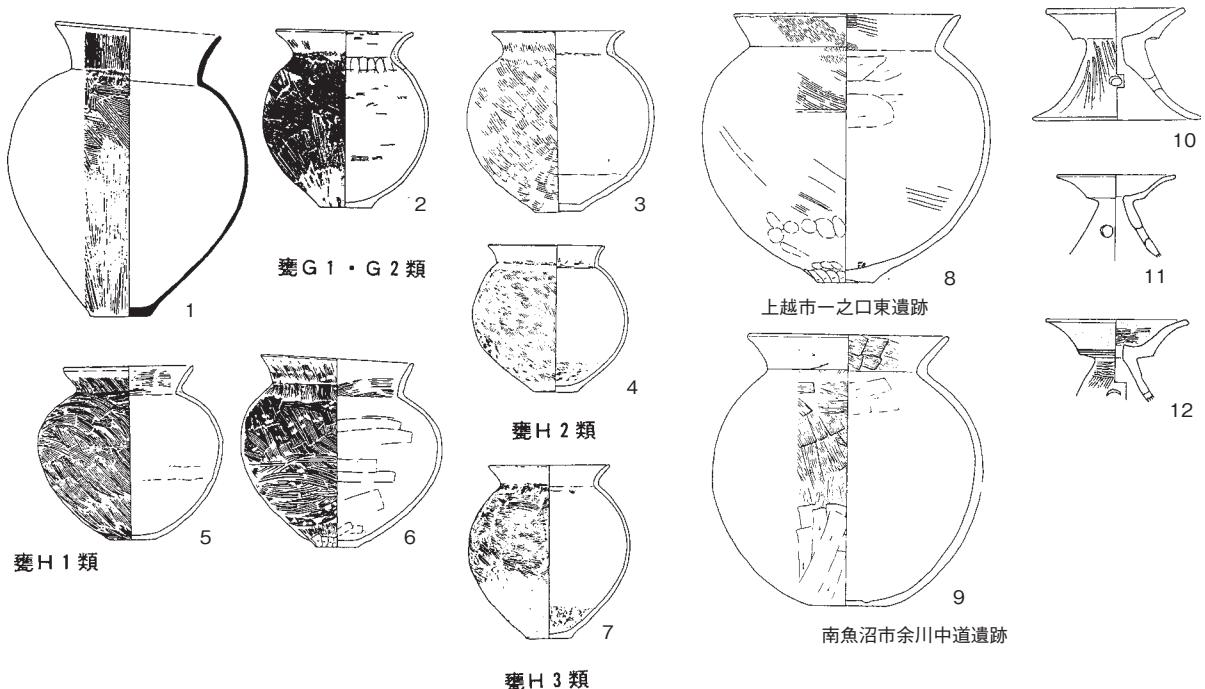
の研究者は新潟シンポ編年7期、田嶋明人氏は8期とする。青木氏様相1と頸城の4段階（7期）を比較すると共通点も多い。小型高杯の第10図66と第11図篠ノ井遺跡SD6023等の1は、ほぼ共通の形態だが、わずかであっても開きが大きい。青木氏の様相2は8期、様相3の篠ノ井遺跡SB7256の典型的な小型丸底壺（同図2・3）から9期、様相4の篠ノ井遺跡体育馆地点の小型丸底壺（同図5）や篠ノ井遺跡SB7639の屈折脚高杯（同図6）から10期と捉えて検討を進める。

青木氏の北信5期は信濃系が急速に解体する時期とされていることから、その存在を信濃からの影響とするのが難しい段階である。このため、多分に器種が限定されるが、青木一男氏の甕H・G類〔青木1998〕をはじめとした細別器種に焦点を当てる。

青木分類の甕H・G類：「ハケ調整くの字甕」で、胴部下半部及び内面にヘラミガキが施されたものがG類、施されないものがH類とされる。G類は、中部高地型櫛描文系土器の伝統をもつものとされ、H類は西川修一氏の「千葉型甕」〔西川1991〕に近い型式で、様相1以前の御屋敷式期に出現しているという。胴部形態で細分され、G類は1・2類、H類は1～3類にそれぞれ細分されている（第13図）。

時期的な変遷ではいざれも様相1以前から確認され、G1類（様相1以前～様相2：7～8期）⇒G2類（様相1～3：8～9期）、H類はH1類（様相1～3：7～9期）⇒H2類（様相1～5：7～10期）⇒H3類（様相2～5：8～10期）という変遷をたどるという。また、他分類の甕との関連では様相1以前に出現し、様相2では主体となり、甕へのヘラミガキは様相3（9期）まで残存し、様相5（10期）では確認できないという。

これらの甕については、春日真実氏の指摘がある。春日氏は妙高市大洞原C遺跡出土土器の検討の中で、第13図8は信濃の影響を受けた甕とした。また、妙高市横引遺跡〔新潟県教委・埋文事業団1996〕や上越市一之口遺跡〔新潟県教委・埋文事業団1994〕など頸城地域に散見できるとし、その他の地域として十日町市柳木田遺跡の甕も類似する資料とした〔春日2001〕。このように、平底・胴張り・大きな平底の土器は、若干ではあるが7・8期以降に越後にもみられる。筆者も南魚沼市余川中道遺跡〔新潟県教委・



第13図 長野盆地南部における甕の分類と越後の類例・器台（8～12はS=1/6）

埋文事業団 2015] の第 13 図 9 を千葉型甕とした [滝沢 2017]。青木氏の分類では在地のミガキを欠くことから甕 H 類となり、厳密に言えば信濃系というよりも千葉型甕の範疇に属する。一之口遺跡や横引遺跡の場合は、地理的に信濃との交流の中で登場したと推測するが、数量は極めて限られた。

ところで、東日本では 7・8 期頃に西川修一氏の「千葉型甕」が南関東から北上して東北一円に拡大する。このインパクトは大きい。一方で、北陸南西部の加賀を中心に布留式系甕に大きく転換する。いずれの地域も前段階からの在地の甕が大きく変容する画期と考える。一方で、北陸北東部の能登・越中・越後・佐渡は、若干の変容はあるものの、基本的には在地の千葉型甕又は能登形甕を踏襲する。信濃系甕・千葉型甕に類似したものが確認できるものの、甕は大きく変容しない点は重要と考えている。越後在地の甕は、9 期頃から口縁端部を面取りしないものが増加するため（北部の阿賀北は除く）、その要素のみを見れば、信濃に限定できないまでも東北・関東など東日本・千葉型甕の影響も否定はできないが、全体のプロポーション（口縁部・胴部・底部形態）は異なるため、厳密な信濃系とは考えていない。

青木分類・器台 B 2 類：田嶋氏が指摘 [田嶋 2009b] するように東海・狭間Ⅲ式 2 段階（漆町 8 群併行）とされる長野市篠ノ井 SB7508 [長野県教委・(財)長野県埋文センター 1997] と同様のものが、長岡市五斗田遺跡（第 13 図 10、長岡市教委 2000）や上越市谷地遺跡（第 13 図 11・12 上越市教委 2009）などで確認できる。越後では多い細別器種ではないが、頸城と信濃川流域で多いとできようか。信濃経由に限定できないが、注目される。

青木分類・鉢 G 類など：青木分類・鉢 G 類は、口縁部が内湾する身の浅い鉢（第 11 図 篠ノ井遺跡 SB7256 の 4）で、仮称・東海型としたものである [滝沢 2012b]。「中部高地では鉢 F 類と共存して鉢 F 類よりも主体型式となる」とされる [青木 1998]。県内でもいくつかの遺跡で確認できるが、数量は多くない。東海地方に多い細別器種と考えており、信濃を経由してもたらされた可能性もあるが、数量から限定的といわざるを得ない。また、大型サイズの小型丸底鉢は関東・東北で盛行するが、新潟県内では明瞭ではない。

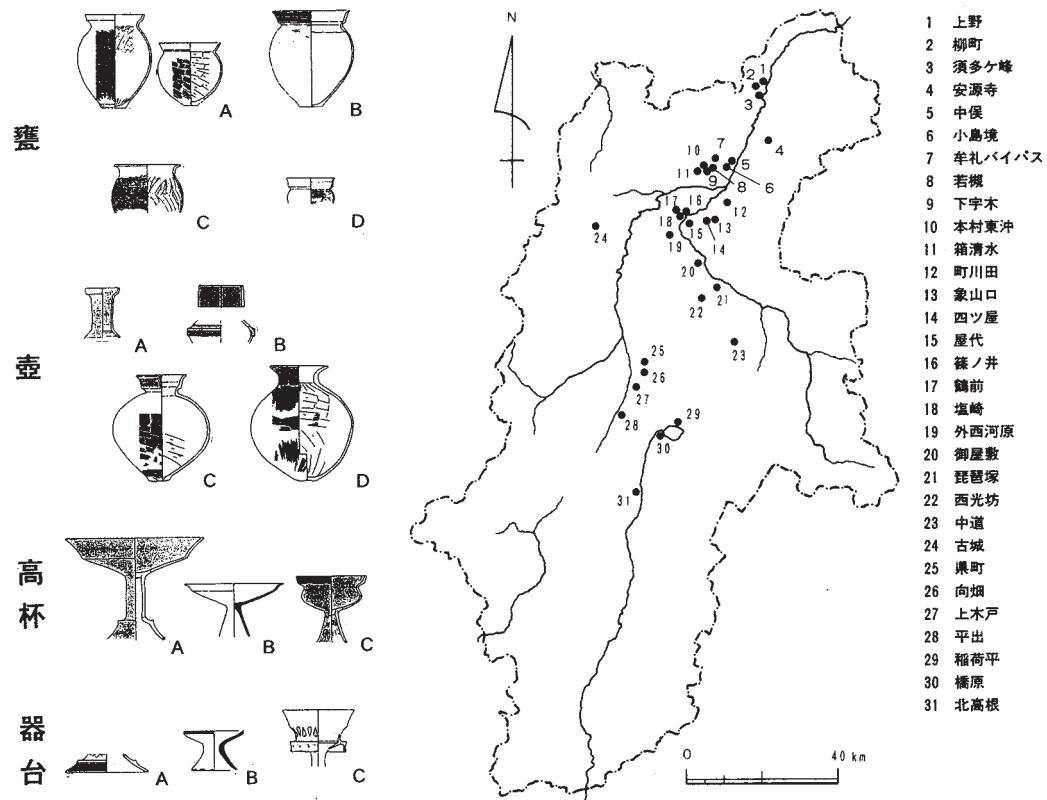
以上のことから、一部で信濃と共通する細別器種は確認できるが数量は多くない。青木分類の甕 H・G 類や鉢 G 類は、関東・東北に多いことからすると、信濃は大枠でその地域圏に組み込まれたが、頸城をはじめとした越後は、完全にはその波に組み込まれなかったと考えたい²⁾。

4 信濃の北陸系土器を踏まえた信越の交流

信濃で検出された北陸系土器に関する論考は、1959 年に桐原健氏が飯山市柳町遺跡出土土器を佐渡・越後経由と指摘 [桐原 1959] して以降、資料数の多さもあって数多くの研究が蓄積された。1993 年には前島卓氏が信濃の北陸系土器を集成し、時期的な変遷を指摘した重要な論考がある [前島 1993]（第 14・15 図）。研究史上、大きな画期であり、前島氏の論考の以前と以後でその指摘状況を概観する。

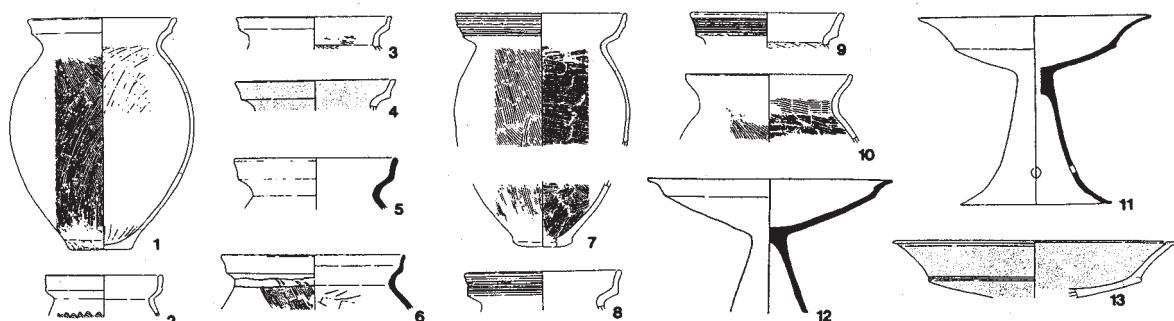
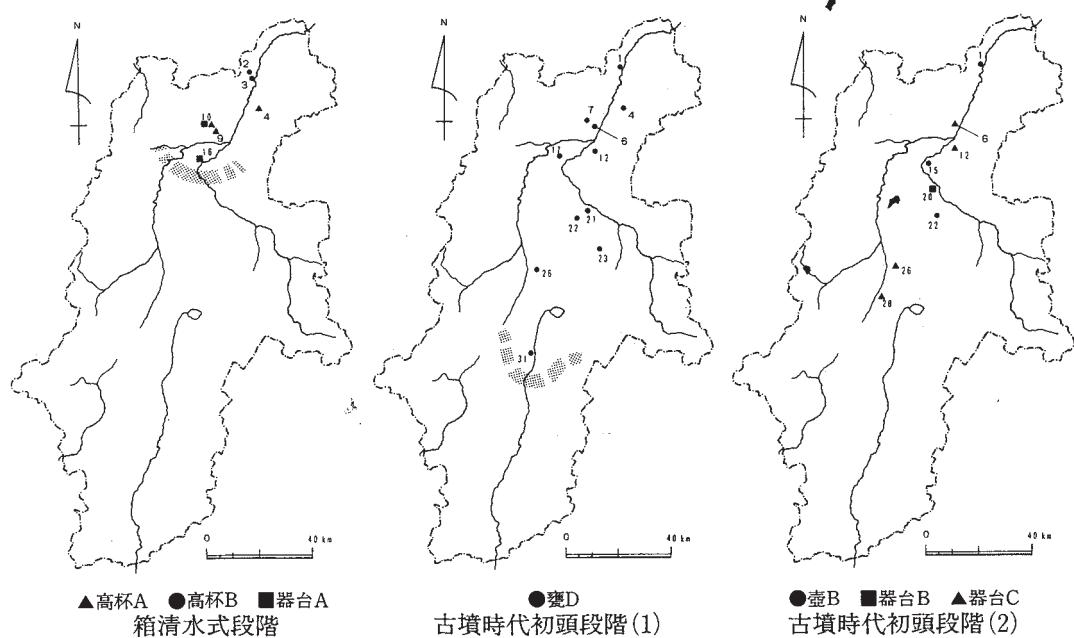
（1）研究略史

1993 年以前：北陸系の流入は、時期的には箱清水式期の段階からとされ [青木和 1984]、北陸では法仏式で、畿内の庄内式、北陸の月影式併行期の北陸北東部系土器が多数存在するとされた [坂井 1984]。系統については、 笹沢浩氏が「古墳時代Ⅰ期後半」（畿内庄内式併行期）に、東・北信や松本平に越後系の土器が多量にみられる（第 15 図 71・86 など）とする一方で、飯山市柳町遺跡出土の甕には越中地方から搬入されたものもあると考えられるとした。また、古墳時代Ⅱ期古段階も引き続き東・北信に越後系土器が多い（第 15 図 62 など）とした。古墳時代Ⅰ・Ⅱ期の越後系土器の流入の要因については、北陸系の玉

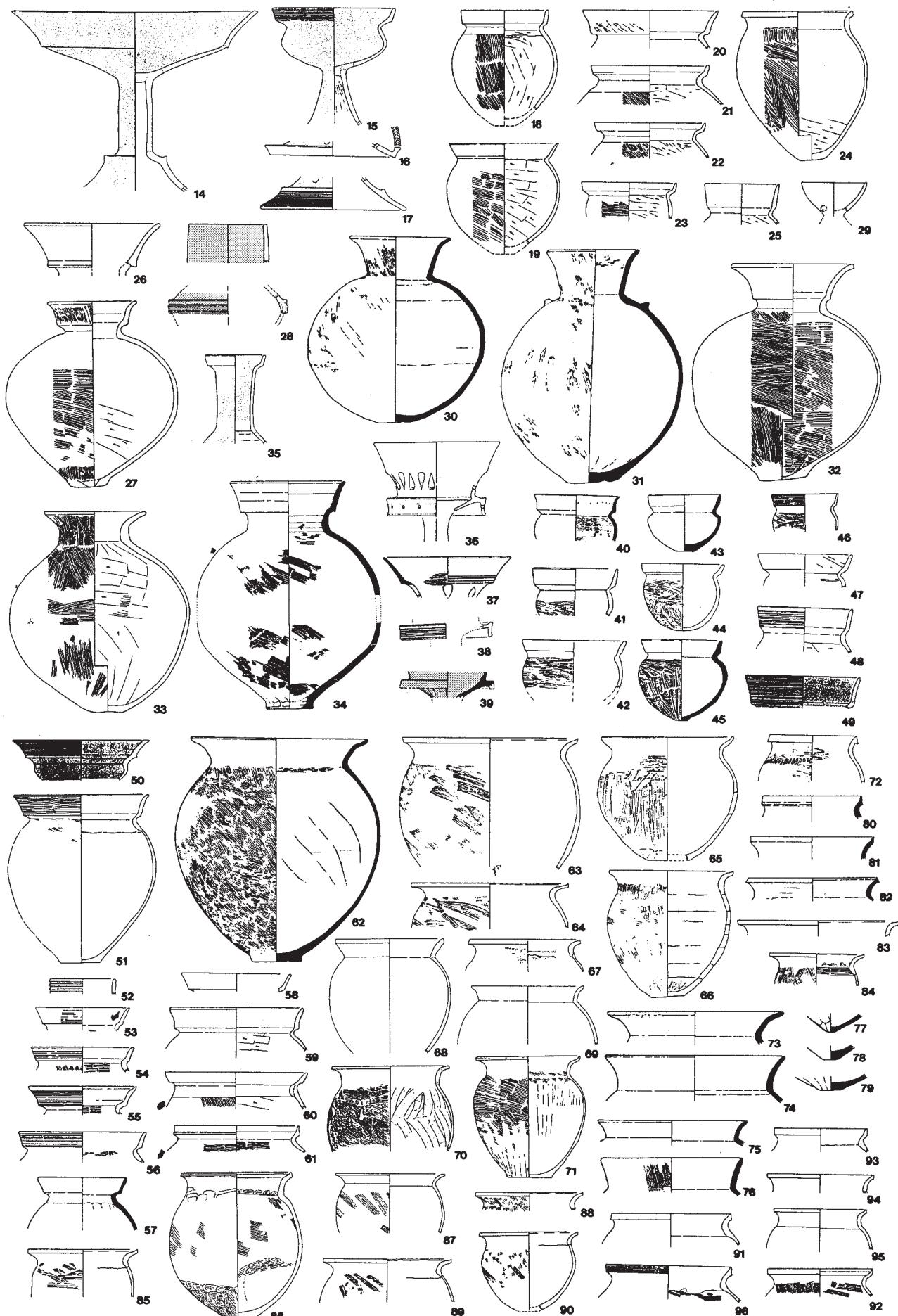


形態分類図

北陸系土器出土遺跡分布図



第14図 長野の北陸系土器 1 (前島1993から抜粋)



第15図 長野の北陸系土器2(前島1993から抜粋)

造集団の移住を想定している〔筮沢 1988〕。1980 年代後半には流入時期とその変遷、分布範囲が既に指摘されている意義は大きい。

1993 年には、千野浩氏が長野市本村東沖遺跡出土の北陸系土器について、栃木英道氏の能登編年〔栃木 1991〕と自身の編年〔千野 1989〕を対比し、箱清水式と北陸北東部系土器の併行関係をより限定した。同年、冒頭に示した前島卓氏は、信濃・箱清水式段階で北信の善光寺平を中心とするが、古墳時代初頭段階には天竜川上流域まで拡大することから、搬入経路を越後から北信の飯山または信濃町を越えるルートと、大町市の古城遺跡例（第 15 図 34）から越中に境を接する地域から姫川を遡り、松本平へ達することも十分に考慮してよいとした。系統については、境を接する越後に限定して考える必要はないかもしれないとした〔前島 1993〕。これは当時、会津における北陸系土器は北陸北東部系でも能登の様相に近いとする見解〔坂井・川村 1993〕を反映したものと考える。加えて、飯山市上野遺跡 H 9 号住出土土器は北陸に非常に近いこと、住居形態も北陸地方に近似することから北陸からの移住も考慮すべきとした。

この段階では、信濃の北陸系土器は法仏式併行期（2 期）から始まり、北信地域に北陸北東部系が主体的に流入し、古墳時代初頭（5 期）以降は天竜川上流域まで分布範囲が拡大することが確認されている。また、北陸北東部内でも越後に限定できない点で一致するが、越中に求める立場〔筮沢 1988〕と能登の可能性を考慮すべきという意見〔前島 1993〕に分かれる。

1994 年以降：1996 年には川村浩司氏が、弥生時代後期の北陸系土器を信濃の住居形態とともに検討した〔川村 1996a〕。川村氏は信濃の北陸系土器について全体的には有段口縁擬凹線文甕より無文の甕が多く、胴部内面のヘラケズリが少ないとから越後的要素を帯びて北陸系が入ることが確認できるとする一方、越後を経由したとしても能登の可能性を考慮しなければならないとした。1998 年には青木一男氏が、北信 3 段階に北陸系譜の甕が出土している点を指摘した〔青木 1998〕。北陸法仏式以前から土器の拡散が確認された点は大きい。2001 年には青木一男氏が再度整理し、1990 年代までに指摘された青木・北信編年の箱清水式期 2 期後半に出現し、北信 3 期以降に本格化し、飯山～長野盆地北部を中心に、上田盆地から松本盆地まで広く分布すると評価〔青木 2001〕し、おおむね一致した見解となったようである。その後も信濃における北陸系は着実に資料が蓄積されていく。

2009 年田嶋明人氏は時期別の流入先にも触れ、北陸系土器の移動が本格化する漆町 2 群併行期（本稿 2 期）を第 1 の画期とし、北陸北東部の型式的特徴とし「越後からの波及が主体で、近接地域間交流」と予測する。続く漆町 3 群併行期（本稿 3 期）は、越後との土器移動も継続していたとする一方「越中でも中・東部地域、婦負を中心とした地域あたりを想定」が土器移動に大きく係わったとする第 2 の画期、北陸北東部系に加え北陸南西部系の土器移動が加わる漆町 4・5 群併行期（本稿 4・5 期）を第 3 の画期とした。漆町 7 群併行期頃まで越中からの土器移動は続き、予想を交えてより厳密に示せば漆町 9 群併行期が第 4 の画期とする〔田嶋 2009b〕。田嶋氏の論考以降、資料はそれほど増加していないようであるが、長野市長野女子高校校庭遺跡で多量の北陸系土器が出土している〔長野市教委 2014〕。平林大樹氏は、本貫地のものと比べると細部の形態が異なるが、北陸北東部でも越中付近に系譜を求めている〔平林 2014〕。

資料数の更なる増加に伴い、法仏式併行期（2 期）を遡る例が指摘されたが、本格化するのは 2 期との評価に大きな変化はない。また、北陸北東部系でも越後を中心に、越中の可能性が指摘される。特に田嶋氏の指摘は、時期別な状況を踏まえたもので、搬入時期・地域をより具体的に提示した点で大きい〔田嶋 2009b〕。以下では、重複を避けるため田嶋氏が触れていない資料（田嶋氏の指摘以降の資料を含む）を中心に筆者の考えを述べるとともに、土器における信越の交流を考える。

(2) 弥生後期 (1~3期)

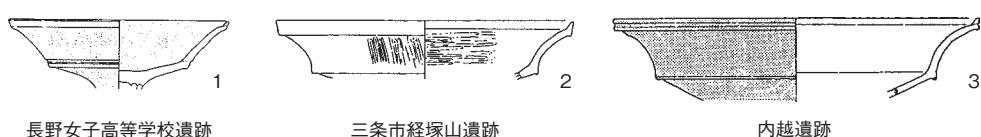
当期について 笹沢浩氏の論考に詳しい。後期前半の状況は明確でないが、後期後半（本稿の2期）では中部高地系の影響が認めることができず、信濃川水系さえ多くないとする。一方で、妙高山麓には後期を通して信濃系土器が主体となり、上越市旧中郷村あたりまでは信濃系土器分布圏に後退しており、妙高山麓が信濃と北陸の境界となる。一方で、北関東で分布圏を保持し、後期後半には南関東の多摩川流域まで影響を与えて横浜市朝光寺原遺跡出土土器を指標とする朝光寺原式を成立させている〔笹沢浩 2004〕。

ほぼ同様の解釈が 笹沢正史氏により示されている。後期は越後と信濃の土器レベルでの関係は極めて希薄であるが、信濃で玉素材の嗜好の変化（鉄石英）と頸城における玉生産が同一の歩調がみられることや両地域でそれぞれの系統の土器が出土することから、交易・情報収集は前段階（中期後半）と大きな変化はないと推測した。弥生後期における信濃系土器の平野部からの後退は、信濃系（栗林）集団の海岸ルート開拓から内陸ルート重視への方向転換の結果、北関東・信濃川流域に信濃系土器が拡散し、本稿の5期以降に北陸系土器の信濃・上野へ拡散するのは、弥生後期における信濃系集団の内陸ルート開拓により、頸城と上野との交流の下地が形成された延長線上に成立したものと理解した〔笹沢 2005a〕。共に、信濃の視点による重要な指摘であり、上記を踏まえて信越の土器交流を考えてみたい。

信濃への土器の移動は、既に指摘されているように本稿の1期後半となる。第14図12 東長峰遺跡の高杯も当期と考えており、青木一男氏の指摘のどおり法仏式以前から移動が始まるとみた。北陸北東部系土器の移動は山形県・福島県が2期2~3、群馬県3期と考えており、信濃では少なくとも1段階早い時期での移動となる。越後でも2期から信濃系が確認できるようになる。数量から言えば、信濃における北陸系の土器が断然に多く、器種も多様である。越後側では比較的広範囲に信濃系が散在する状況にあり、器種も甕が圧倒的に多い。壺や高杯が若干確認されているにすぎず、鉢は確認できていない。

信濃の北陸系土器は先学の指摘どおり2期の資料が多く、田嶋明人氏が本格化するとした時期と一致する。北陸北東部の能登・越中・越後・佐渡のうちどこの土器が動いているかは、甕口縁部の類別構成比や最別器種の出土頻度などを除き、厳密な意味での地域性の抽出は困難である。また、越後でも頸城の場合、能登・越中との識別は更に困難となる。出土頻度が低い特徴的な細別器種が考えれば、高杯では口縁上端部がつまみ上げられた長野女子高校校庭遺跡SB1の高杯（第16図1）に注目したい。数量が少ないながらも越後では、三条市経塚山遺跡〔三条市教委 1999〕や柏崎市内越遺跡〔新潟県教委 1983〕で確認できる（第16図2・3）〔滝沢 2006〕。現状では、越後からの波及と考えたい。

上記と関連して、越後の信濃系土器も頸城を中心としながらも広範囲に及ぶ。この要因として、 笹沢浩氏が指摘する玉素材の鉄石英が注目される〔 笹沢 2004〕。越後の管玉生産は弥生時代中期後半に大規模となり、典型例として長岡市大武遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2014〕、柏崎市下谷地遺跡〔新潟県教委 1979〕、上越市吹上遺跡〔上越市教委 2006 ほか〕や、佐渡市新穂玉作遺跡群〔計良 1950 など〕などがある。後期は規模が小さくなるが、阿賀野川以南の海岸平野部、すなわち北陸北東部系土器分布圏で小規模生産遺跡が散見され、鉄石英の石核や未成品が出土する遺跡も多い。柏崎平野の西谷遺跡〔刈羽村教委



第16図 口縁部上端部が積み上げられた高杯(S=1/6)

1992]、信濃川左岸では奈良崎遺跡 [新潟県教委・埋文事業団 2002]・大武遺跡 [新潟県教委・埋文事業団 2014]、頸城の上越市下馬場遺跡 [新潟県教委・埋文事業団 2005] などで鉄石英の玉作関連遺物が確認されている。鉄石英産管玉の生産地との交流で、信濃との結び付きを想定することは可能である。

また、近年の研究状況からガラス玉・鉄など日本海を舞台とした流通も注目される。越後では2期に鉄製品の出土が多くなるが、分布の中心は頸城である。鉄器の伝来については、日本海側をリレー方式による伝播とする意見はあるが、筆者は上越市裏山遺跡の鋤・鋤先の存在などから、北陸を飛び越えた北九州あたりからの直接の伝播も想定したいとした [滝沢 2014]。越後は弥生後期において鉄製品を受容できる立場にあり、信濃への鉄の経由地としても重要なルートと考えている。ガラス小玉も同様であろう。2期に入って信濃に越後を中心とした北陸北東部系土器が流入する要因の一つに、鉄・ガラス小玉など日本海経由で流通するものの動きと一致すると考える。一方で、信濃に多い鹿角装鉄剣が信濃川下流の新潟市古津八幡山遺跡で確認できる。本遺跡で箱清水式土器が出土していることも調和的な状況と考えたい。

3期以降に越中の可能性がある土器の流入開始は、大きな変化と考える。3期の越後は集落数が激減する大きな画期である。日本海経由で流通する物資の流通の変化からも、信濃に越中あたりの土器が流入することも大きな要因と考える。

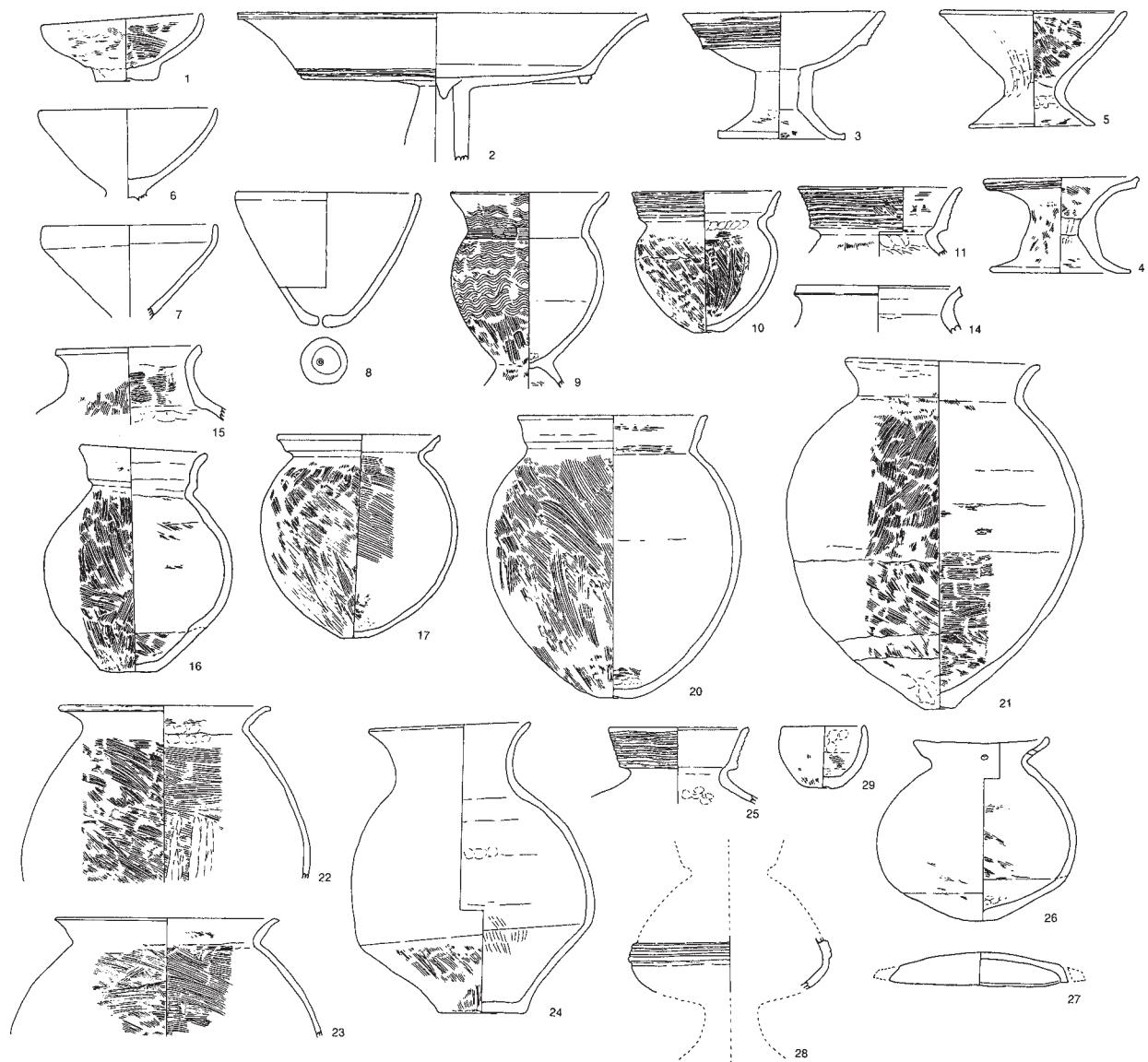
(3) 古墳時代早期（4～6期）

少なくとも5期に入ると信濃の北陸系土器の分布域は拡大し、出土量が増加する。一方で、越後の信濃系土器は信濃川流域にも分布はするが頸城に集約化され、特に釜蓋遺跡に集中するなど、大きな傾向差として捉えられる。引き続き越中の土器と想定されるものも多いが、一方で上越市釜蓋遺跡でも北陸南西部の月影甕が色濃く分布するなど、越中との区分が困難なものも多い。ただし、前章でも指摘したとおり、越中に比較的色濃い細別器種が存在することも確かである。このことについて、高地性環濠集落の環濠埋没時期にその変化を求めることがある [滝沢 2009]。すなわち、能登と加賀国境付近の大西山遺跡 [高松町教委 1988]、信越国境の斐太遺跡矢代山B地区、越後と会津国境とは言えないまでも、越後平野北東端には新潟市古津八幡山遺跡の環濠が埋没するのが3期である。この時期に何らかの大きな動きがあったものと考えている。ただし、4期以降にも環濠集落は独立低丘陵・平地で存続しており、上越市釜蓋遺跡、刈羽村西谷遺跡、長岡市横山遺跡がそれにあたる。これらの環濠の埋没は5期と考えている。

一方で、信濃の環濠集落の状況はどうか。最も新しい環濠集落・高地性環濠集落は中野市がまん淵遺跡である [長野県教委・県埋蔵文化財センター 1997b]。周辺との比高約 15～20 m で、部分的な調査のため環濠の範囲は明確ではないが、推定される環濠の範囲は長さ約 180 m、幅約 50 m 程度となろうか。環濠とされる SD 1 出土土器は3期頃で、環濠の埋没時期は4期を射程にいたった時期が想定されている [土屋 1998]。成立要因については、善光寺平北部から直江津に続く国道 18 号線沿いにあること、がまん淵遺跡の存続した前後の時期に北陸系土器群が善光寺平北部に流入することから、箱清水土器文化圏内の諸事情よりも北陸地域などの対外的な諸事情により成立したものと予想されている。

がまん淵遺跡の環濠埋没時期が3期とすれば、信越国境の越後側の斐太遺跡、会津との境界にある古津八幡山遺跡、西の越との国境付近の大西山遺跡と同時期となる。信濃系土器に不案内なため、環濠埋没時期を限定できないが、仮に4期であったとしても、北陸系土器の流入が一挙に増加する一方、信濃系土器が頸城を中心に分布する状況と関連するように考える。

当期に北信あたりで散見される、第9図七瀬遺跡第14号住居のくの字口縁・ハケ調整甕（1・2）の系譜を明確にできないが、越後あたりのものであろうか。かつて川村浩司氏は、くの字口縁で口縁端部に



第17図 長野県更埴市屋代遺跡群屋代地区14号住居跡出土土器(S=1/6)

面を持たないものも千種甕に含める見解を提示しており [川村 1993a]、のこととも関連しそうが、越後にも当期にこのような甕は存在しており、系譜の追求が必要な細別器種と考えている。

田嶋氏が触れていない資料として更埴市屋代遺跡群屋代寺地区 14 号住居跡に注目している。土器は北陸系土器が主体にすら見える (第 17 図)。竪穴建物も中央に炉を配し、四本柱など北陸の様相と一致する [更埴市教委 2002]。中山南形となる大型有稜高杯 (第 17 図 2) は口縁有段部までの立ち上がりが内湾主



第18図 高杯と蓋(S=1/6)

体の能登に対し、外傾・盤状主体の越後・越中であることから〔滝沢2010〕、能登的というよりは越中や越後・頸城的と考える。

同じく中山南形の可能性があるものとして、口径が小さいものが上越市大森遺跡〔上越市教委2010〕で確認できる（第8図20）。越後では極めて例外的なものであるが、北信あたりで多い（第18図1～5）。在地と北陸系の折衷〔鶴田1994〕と評価されているものであり、越後・越中からの情報をもとに北信で発達したものか、または頸城あたりの情報をもとに北信で製作されたのかの判断は保留するが、共有細別器種として両地域の交流を示すものと考える。東信・北部の上田市浦田A遺跡SB07の蓋（第18図9）にも注目したい。口縁部が特に深いもので、類例は越中に多い（第18図6～8 滝沢2019）。数量が少なく、系譜を掴めていないため越中型として良いかは資料の増加を待たざるを得ないが、東信あたりへの波及ルートとして重要なものと考える。

5期でも後半ないしは6期頃を境に北陸南西部的な有段口縁擬凹線文甕や装飾器台（第15図36～38）は基本的に波及しなくなる。これは越後でも同様である。その要因として、越中・婦負あたりの勢力による北陸南西部系の動きを止めることを想定した〔滝沢2009〕。当期においても、以前指摘されていたような能登と断定できる資料の抽出は困難である。越後・越中あたりからの波及、北陸南西部の一時的な波及とその動きが止まるなど、目まぐるしく変化する時期と考えたい。

（4）古墳時代前期（7～10期）

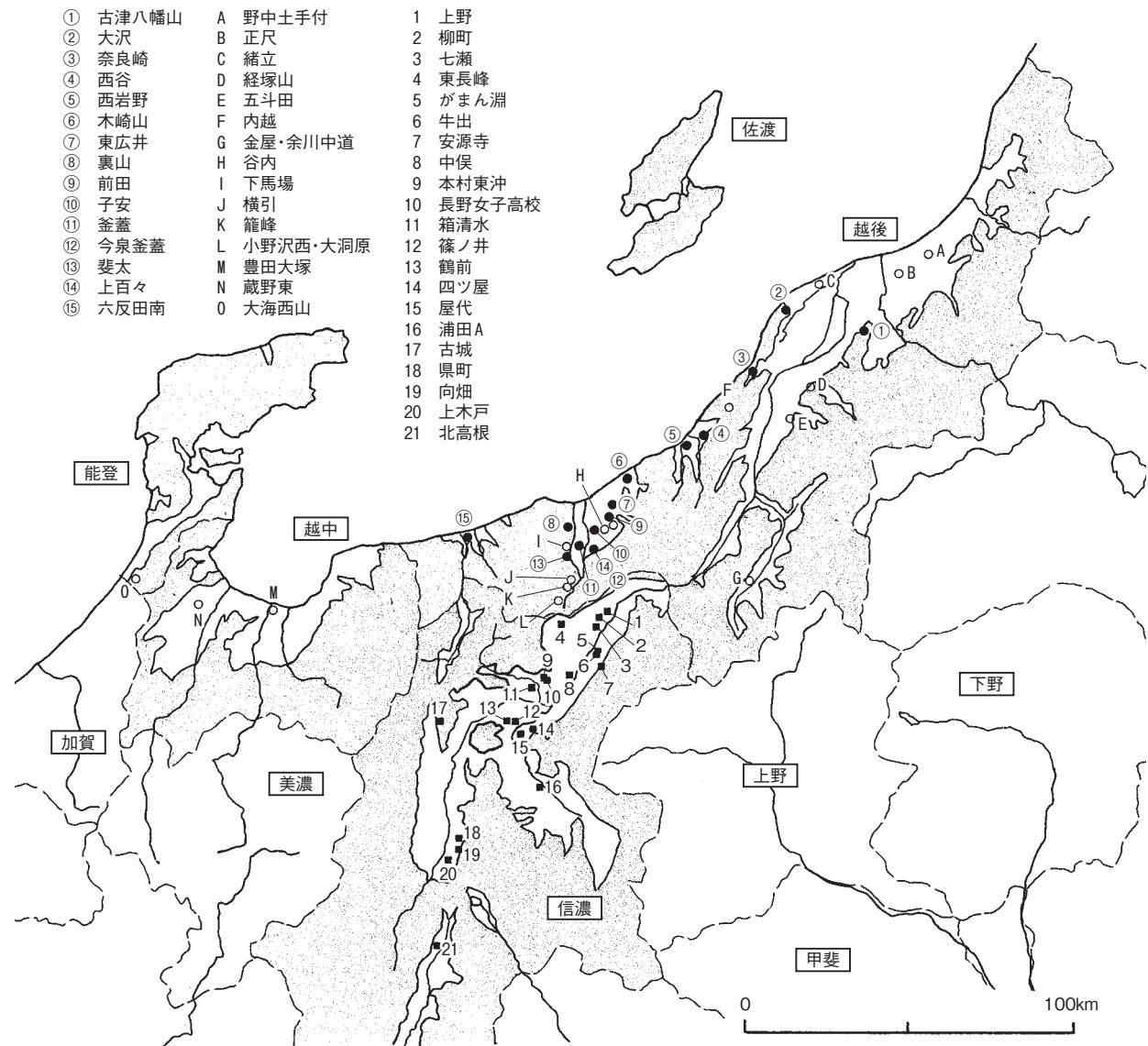
前章でも述べたとおり、北陸北東部系土器は存在すること、越後でも頸城を中心に信濃と共有の細別器種は存在しても、前段階とは質的に大きく異なることと考えている。両地域は大型古墳が出現する9期以前から日本海ルートの変更に伴い、より内陸ルートを重視した信濃と、日本海ルートを継続しつつ、内陸ルートの色調が濃いながらも完全に変換しない頸城とに区分され、交流は続けながらも徐々に質的に変化した段階と考えたい。

5 今後の課題

土器以外の要素を含めても、本稿の2～6期頃の信濃における北陸北東部系土器は、越後・越中あたりの土器が多く出土しており、特に5・6期では分布範囲の拡大とともに北信地域では移住を想定させるほど建物型式が北陸北東部系とできる遺跡も存在する。既に指摘されてきたことであるが、越中あたりからのルートを含め検索が必要と考える。

一方、越後では少ないながらも信濃系土器が2期を上限に5～6期までは確実に確認できる。時期が新しくなると、信濃系土器は頸城に限定されていく状況も確認できることから、信濃川流域というよりも陸路と関川の果たした役割が大きいと考える。これが7期以降には信濃系の認定の問題もあり、土器の交流は継続しながらもやや弱くなるように感じられる。信濃系土器は信濃のどの地域からの流入かも大きな課題である。土器胎土の検討ができていないが、信濃からの搬入と考えるもののか、在地の胎土と考えられるものが高田平野あたりに多い。このことを踏まえれば、信濃・北信に限定できないように思える。

信濃との交流は、越後ルートか越中ルートかのカギを握るのが妙高山麓の遺跡と考える。冒頭でも述べたように、今回検討の対象から除外した地域でも特に注目されるのが頸城平野と信濃の中間地域に当たる遺跡の動向である。弥生時代後期は信濃系土器が主体で、5～6期には北陸系土器が定量確認されるようになる。特筆すべきは外来系土器の存在で、畿内系のタタキ甕・布留式系甕の他、東海系S字状口縁甕又はその模倣と考えられる台付甕が目立つ。現状の編年観に照らすと、5～10期頃の状況と考えている。



第19図 越後と信濃の関連遺跡分布図

上越市籠峰遺跡の外来系土器を検討した川村浩司氏は、S字状口縁甕2点は漆町編年7群・同8~9群、布留式甕を漆町編年9~10群に位置づけ、岩崎卓也氏の「東国の要所要所に畿内系土器が流入」し「畿内を中心とする人間の動きの結節点に古式前方後円墳の成立との間には、何らかの関係があった」とする指摘〔岩崎 1984〕を重視し、籠峰遺跡が岩崎氏の結節点か、単なる通過点か、分布域の中の一地点かは当地域の資料の蓄積をまって判断しなければならぬとした〔川村 1988〕。

この後、比較的距離が近い妙高市横引遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 1996〕では布留式系甕・S字状口縁甕が、妙高市大洞原遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 1997〕では、県内唯一となる庄内大和甕のほか、畿内系タタキ甕やS字状口縁甕が、小野沢西遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2004〕では畿内系タタキ甕・S字状口縁甕・布留式系甕が出土している。頸城の平野部の遺跡で出土した畿内系タタキ甕・布留式系甕を含め、これらの搬入ルートは東海から信濃経由で頸城の平野部に流入するという見解が、新潟県教委・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団の報告書で多い³⁾。

一方で、かつて筆者は越後のタタキ甕・布留式系甕を集成し、タタキ甕については北近畿とされる丹後・

丹波、近江経由の日本海ルートを想定した。布留式系甕は、頸城の下割遺跡・津倉田遺跡の状況から信濃地域への搬入路として重要な意義をもつとした上で、海岸ルートのみならず山間ルートの存在も大きいとした〔滝沢 2007〕。この時期、加賀産の布留式系甕の全国の拡散〔米田 1998 など〕に対しての意見であり、本県山間部の魚沼地域の魚沼川流域に位置する南魚沼市金屋遺跡〔新潟県教委・埋文事業団 2006a〕でも確認されることから、海岸ルートだけに限定できないとしたことによる。胎土・形態等を含めて分析を続けたいが、少なくとも畿内系とされるタタキ甕は本稿の4・5期と7期を中心に認められることや畿内での拡散時期、太平洋側の分布状況から2007年の見解を修正する必要は感じていない。また、布留式系甕については日本海ルートのみとは考えていないが、他地域の出土状況や越後系土器の動態などから、本県の報告書で主体的な意見である東山道（東海・信州・関東地方）を介し、関川水系の内水面をたどって平野周辺に拡散したとの印象は持ち合わせていない。確かに東海系土器は長野・北信地域に色濃く分布する一方で、越後全域では数量が少ない。東海系S字状口縁甕については東山道経由、長野から頸城平野を通じて越後への伝播はあったと考えるが、畿内系は日本海⇒頸城⇒信濃とルートで、土器系統別に伝播したものが妙高山麓で合流するような伝播は想定できないか。青山博樹氏が指摘するチマタのような状況である〔青山 2014〕。引き続き検討を進め、より具体的な根拠を示したい。

今回、直接の検討対象から除外した信越国境付近でも妙高山麓の大洞原C遺跡、小野沢西遺跡、籠峰遺跡などは、信越の関係のみならず東日本における土器の移動を考える上で極めて重要な遺跡と認識している。いずれも建物跡等、集落の痕跡は未確認であるが、時期的に信越のみならず、畿内・東海との関係も読み取れる可能性を含む。細別時期毎に信濃系が圧倒的に多い弥生後期前半（1期）から北陸北東部系の流入（2期）を経て、北陸北東部系主体ないしは信濃系との拮抗に東海系・畿内系が交わる地域の印象をもつ。現状では、検討未了のため扱うことができなかったが、春日真実氏〔春日 2001〕や笹沢正史氏の変遷案〔笹沢 2005b〕を参考に整理したいが課題も多い。信越国境付近にあり、新潟県の大洞原遺跡・小野沢西遺跡・籠峰遺跡、長野県の川久保遺跡⁴⁾〔長野県埋蔵文化財センター 2004〕の状況は、両県間の関係を敏感に反映した極めて重要な遺跡として、今後も検討を続けたい⁵⁾。

6 おわりに

信濃系土器の越後の状況については、交流の玄関口となる頸城でも上越市の論考で的確にまとめられている。弥生時代中期後半の信濃・栗林式土器は県内でも広範囲に分布し〔笹沢 2009〕、上越市吹上遺跡では多量である〔上越市教委 2006 ほか〕。吹上遺跡の中期後半の土器は吹上I期・II期に区分されるが、北陸・小松式系統の土器と信濃・栗林式土器の比率は、吹上I期では小松式系統7～8割：栗林式2割前後であるが、吹上II期では逆転し、小松式系3割前後、栗林式6～7割となる〔笹沢 2006〕。このことについて笹沢浩氏は、吹上I期では玉作が盛んに行われていたこと、山陰・瀬戸内・畿内・東海地方の広範囲の遺物が認められることから、日本海沿いに海の道が積極的に利用され、吹上産の玉類が「海の玉の道」で西日本や東海に、中部高地の玄関口となる「陸の玉の道」で運ばれていたとする。吹上II期には信州栗林式人の玉の趣向が大きく変化し、佐渡産の鉄石英（赤色）を好んだことから、吹上遺跡の玉作の規模の縮小、佐渡産の管玉の運搬中継地としての役割に変化し、栗林式人が大挙して入って来たとする（笹沢浩 2004〕。その後、地域圏に関する新たな知見は得られていないが、重要な指摘と考えている。

それでは、その後はどのように変化するか。栗林系土器が日本海側にも幅広く分布し、北は越後平野の最奥部、南は北陸南西部にまで達するのに対し、箱清水系は頸城の現・糸魚川市あたりが最南地となる。

このような大きな変化について、これまで、あまり語られることがなかった本県における弥生時代後期～古墳時代前期の信濃系土器について集成を行い、その分布状況が示す意義について考えてきた。明らかになつたことは多くないが、下記の点が確認できた。

- ・信濃系土器は2期から確認できる。分布は2～3期あたりまでは信濃川流域や柏崎平野、頸城の高田平野や糸魚川市に及ぶが、4期以降は頸城が主体となる。器種は甕が圧倒的に多く、壺・高杯は頸城の高田平野に限定される。各器種が揃い、数量が多い信濃の北陸系土器のあり方とは大きく異なる。
- ・2～3期に信濃系土器の胎土は、信濃系と区分が困難なものが多く、器形・文様を模した在地産とは考え難い。また、出土遺跡は、信濃で需要が高まつた鉄石英製玉類を製作していた可能性が高い。鉄製品を含め日本海を舞台とした流通網との関連が予想される。一方で、4～5期以降に信濃系土器が頸城でも釜蓋遺跡では、信濃系の土器胎土とは考え難いものもあり、在地産の可能性があるものが一定量存在する。また、釜蓋遺跡に集中することについては、北信の環濠集落の解体など信濃側の秩序の変更が予想され、北陸南西部系土器の流入、北陸北東部系土器の大量出土とも関わる可能性がある。
- ・一方で、5～6期頃には信濃系の一部のみ取り入れた可能性がある土器が信濃川下流域や北部の阿賀北でも確認されている。ダイレクトな交流ではないものの、完全な断絶とは言い難い。
- ・7期以降は信濃系の抽出は困難であるが、そのものの流入は前段階に比べて多くない。特定要素の一部を取り入れた状況となり、やがて9期頃には大きく変換したと予想する。
- ・信濃の北陸系土器については、これまでの 笹沢浩氏や田嶋明人氏が指摘しているとおり、北陸北東部でも越後の土器が多いと考えるが、3期頃には北陸北東部でも越中に多い細別器種が確実に分布しており、少なくとも5期には北陸南西部のものが波及している。ただし、北陸南西部の土器は、7期には判然としなくなり、再び北陸北東部でも越後あたりの土器が主体と考える。
- ・越中や北陸南西部系土器の波及経路については明確にできないが、少なくとも5～6期あたりには信越国境付近の新潟県妙高市あたりから長野県信濃町あたりで北陸北東部系・信濃系が拮抗して、畿内系や東海系が色濃く分布する特異な様相を呈する。頸城と北信はこの付近を経路した交流を模索したいが、現状では明確にできない細別器種も多いことからここでは保留し、検討を継続したい。

本稿を作成するにあたり、下記の方々から多大のご教示・ご配慮を賜りました。文末ではありますが、記して感謝申し上げます。（五十音順敬称略）

石黒立人、田嶋明人、土屋 積、中島義人、久田正広、福海貴子、山岸洋一、湯尾和広、渡邊朋和

註

- 1) 青木一男氏は、壺B3類の出現を重要な画期とし、1期1・2段階を箱清水I式、1期3～6段階を箱清水II式とし [青木1999]、従来設定されてきた箱清水1式・2式とは異なる概念とした。
- 2) 川村浩司氏は、9期頃に100mを超える古墳が「古代の「道」に近い領域、あるいは「道」まではいかなくとも完全に「国」を超える領域の支配者の墓の可能性がある」とし、「越後の北部（阿賀川以北）は（略）、東北側の領域に取り込まれたとみることはできないでだろうか」とする [川村1996b]。現状では頸城の古墳の規模は30m台であり、9期頃の古墳は明確でない。川村氏の論考後、越中では100mを超える柳田布尾山古墳の存在が明らかになり [氷見市教委2000]、北信の森将軍塚古墳 [更埴市教委1992] と共に頸城が取り込まれたとする想定も可能となろう。ただし、筆者は2000年代以降の調査で明らかとなつた土器・集落から、越後・頸城は、信濃または越中に取り込まれたようには見えない。未発見の古墳の存在を想定したい。
- 3) 妙高市大洞原遺跡の報告書で三ツ井朋子氏は、東海・畿内・近江系土器は客体的な存在とし、東海系土器の当地域への流入は赤塚次郎氏の第一次拡散時期 [赤塚1990] を契機に越後に波及し、この際に畿内・近江系土器を伴つて来たと考えられるとする。大洞原C遺跡の位置する妙高山東麓は、東海地方から北陸地方へ通じるルートの一つであり、このルート上に位置する本遺跡は近隣地域との交流を深めながら、東海系の第一次拡散時期により波

及した土器を積極的に取り入れたとした〔三ツ井 1997〕。東山道ルートで、東海・畿内・近江系土器が連動して本地域にもたらされたともとれ、当時としてはかなり踏み込んだ解釈を提示している。

直近の例としては、上越市下割遺跡での尾崎高宏氏の指摘がある。畿内系タタキ甕の出土量が県内他遺跡を圧倒する下割遺跡では、布留式系甕も一定量出土している。時期が異なるタタキ甕と布留式系甕の畿内系甕は、日本海側では越中東部を境に分布が確認されておらず、主に太平洋側を中心に分布しているとし、東山道（東海・信州・関東地方）を介し、関川水系の内水面をたどって平野周辺に拡散したものと考えられるとする〔尾崎 2011〕。

- 4) 長野県信濃町の川久保遺跡は複数年調査が行われているが、トンネル坑口直下の斜面部と低地部の2004年度報告では自然流路が中心で遺構は判然とせず、縄文時代～中世まで幅広い時代の遺物が出土しており、本稿の5～10期、古墳中・後期が特にまとまる。北陸北東部系・信濃系を主体に、東海系S字状口縁甕は口縁部で7個体、畿内系タタキ甕も2点、布留式系甕3点が確認されているなど〔長野県埋文センター 2004〕、土器様相は妙高市小野沢西遺跡や大洞原C遺跡などに類似する。大洞原C遺跡・小野沢西遺跡ともに、調査対象範囲内に建物跡等をはじめとした遺構が明確でないことから、調査区域外に集落が存在すると指摘されている〔三ツ井 1997、土橋 2004〕。
- 5) 例えば、小野沢西遺跡の報告番号128・129は土橋由理子氏が甕G類とし、口縁部が強く外反する薄手で精緻な作りであることから山陰の中期中葉・土井窓式〔長井 1996〕に類似し、「山陰系の甕の搬入品・模倣品」「おそらく県内初出」とした〔土橋 2004〕が、大洞原C遺跡で系統不明とされた甕（報告番号55）と形態・胎土、胴部上位のミガキ状調整など酷似する。大洞原C遺跡の甕について、春日真実氏は古墳時代前期後半〔春日 2001〕、野村忠司氏は弥生中期後半の畿内以西〔野村 2005〕とする。特徴に乏しい、くの字口縁甕が時期的な一括性の乏しい出土状況の場合、その位置付けが極めて困難なこともあります、引き続き検討を続けたい。

引用参考文献

（信濃系土器出土遺跡報告書等）

- 新井市教育委員会 1985 『昭和59年度新井市遺跡調査報告書 上百々遺跡・高柳宮ノ本遺跡』
- 柿崎町 2004 『柿崎町史』通史編
- 柏崎市教育委員会 2019 『西岩野2』 柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 刈羽村教育委員会 1992 『西谷遺跡』 刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 笛沢正史・滝沢規朗 2002 『2子安遺跡』『上越市史』資料編2 考古
- 三和村教育委員会 2003 『東広井遺跡発掘調査報告書』 三和村埋蔵文化財調査報告書第12集
- 上越市教育委員会 1999 『上江保倉地区は場整備事業関連発掘調査報告書（八幡遺跡・前田遺跡）』
- 上越市教育委員会 2008 『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』
- 上越市教育委員会 2009 『子安遺跡』
- 上越市教育委員会 2010 『今泉釜蓋遺跡』
- 上越市教育委員会 2013 『釜蓋遺跡確認調査概要報告書』1
- 上越市教育委員会 2015 『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』2
- 滝沢規朗 1994 『新井市斐太遺跡群の出土土器について』『新潟考古』第5号 新潟県考古学会
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994 『一之口遺跡東地区』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000 『裏山遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002 『奈良崎遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2008 『六反田南遺跡 前波南遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集
- 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010 『六反田南遺跡Ⅱ』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集
- 新潟県教育委員会・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 2016 『六反田南遺跡V』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第261集
- 新潟市教育委員会 2014 『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書-第15・16・17・18・19次調査-』
- 新津市教育委員会 2004 『八幡山遺跡群発掘調査報告書-第11・12・13・14次調査-』
- 卷町 1994 『大沢遺跡B'地区』『卷町史』資料編1 考古
- 斐太歴史の里調査団・妙高市教育委員会 2005 『斐太遺跡矢代山B地区』 斐太歴史の里調査報告書第3集
- 斐太歴史の里調査団・妙高市教育委員会 2006 『矢代山墳墓群』 斐太歴史の里調査報告書第5集（論考等）
- 相田泰臣 2014 『第VI章第1節 古津八幡山古墳築造以前』『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書-第15・16・17・18・19次調査-』 新潟市教育委員会
- 青木和明 1984 『箱清水土器の編年予察』『長野考古学会誌』48
- 青木和明・飯島克也・若狭徹 1987 『箱清水土器と樽式土器』『弥生文化の研究』第4巻 雄山閣

- 青木一男 1993「土器様相の素描」『長野県考古学会誌』69・70
- 青木一男 1997「土器群の動態からみた御屋敷期」『長野県考古学会誌』82
- 青木一男 1998「第4章 成果と課題」『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年(メモ)」『長野県の弥生土器編年』長野考古学会弥生部会
- 青木一男 2001「倭国大乱前後の箱清水式土器様式圏」『信濃』53-11
- 青山博樹 2014「列島東北部の交流拠点とその性格」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学研究会記念シンポ資料集 西相模考古学会
- 赤塙 仁 1994「第7節 弥生時代後期～古墳時代初頭の土器様相」『県道中野豊野線バイパス 志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 赤塙次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 安立 聰 2005「魚沼地域における古墳出現期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 荒木勇次 1996「大沢遺跡B'地区 出土遺物」『巻町史』資料編1 考古 巷町
- 岩崎卓也 1984「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学III』
- 岩崎卓也 1996「中部山岳地方の4世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 大木紳一郎 2020「群馬県における弥生時代後期の土器について」『研究紀要』38 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2011「第VII章2 畿内系甕(タタキ甕・布留系甕)」『下割遺跡III』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第217集) 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加治川村教育委員会 2004『野中土手付遺跡』
- 春日真実 2001「新潟県大洞原C遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」『研究紀要』第3号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川村浩司 1988「新潟県籠峰遺跡出土の外来系土師器3例」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1993a「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1993b「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 1996a「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護』甘粕 健先生退官記念論集刊行会
- 川村浩司 1996b「越の土器と古墳の展開」『越と古代の北陸』名著出版
- 川村浩司 1999「庄内並行期における上野出土の北陸系土器について」『庄内式土器研究XIV』庄内式土器研究会
- 桐原 健 1959「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」『考古学雑誌』45-1 日本考古学会
- 桐原 健 1980「信越両国間交流についての考古学的所見」『信濃』21-4
- 黒崎町教育委員会 1994『緒立C遺跡発掘調査報告書』
- 計良由松 1950『佐渡における新穂村文化のはじまり 附玉作遺跡発掘調査』
- 更埴市教育委員会 1992『史跡 森将军塚古墳』
- 更埴市教育委員会 2002『屋代遺跡群附松田館』
- 坂井秀弥 1984「新潟県の様相」『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化材研究所ほか
- 坂井秀弥・川村浩司 1993「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
- 笹沢正史 2005a「頸城地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 笹沢正史 2005b「小野沢西遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第2分冊 新潟県考古学会
- 笹沢正史 2006「第VII章まとめ」『吹上遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 笹沢正史 2009「新潟県出土の栗林式土器」『新潟県の考古学II』新潟県考古学会
- 笹沢 浩 1970「箱清水式土器の再検討」『信濃』22-4
- 笹沢 浩 1988「4古代の土器」『長野県史』考古資料編全1巻(4)
- 笹沢 浩 2004「第3章 弥生文化と農耕社会」『上越市史』通史編1 自然・原始・古代 上越市
- 三条市教育委員会 1999「内野手遺跡・経塚山遺跡」
- 上越市教育委員会 2006『吹上遺跡発掘調査報告書』
- 上越市教育委員会 2009『津有南部第2地区は場整備事業地内発掘調査報告書5(谷内遺跡・劍宮田遺跡)』
- 上越市教育委員会 2010『三和南部地区は場整備事業地内発掘調査報告書(大森遺跡)』
- 高松町教育委員会 1988『大海西山遺跡』
- 滝沢規朗 1993「越後における古墳出現前後の土器様相-甕の種別構成比と内面調整を中心に-」『新潟考古学談話会会報』第11号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2005a「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会

- 滝沢規朗 2005b 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2006 「口縁端部上端がつまみ上げられた有段高杯－古墳出現前に認められる一タイプの雜感」『新潟県考古学談話会会報』第31号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2007 「新潟県におけるタタキ甕・布留式系甕」『研究紀要』第5号 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2008 「旧紫雲寺型周辺の西川内南遺跡出土土器について－阿賀北における古墳時代前期の土器検討－」『三面川流域の考古学』第6号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2009 「新潟県の月影甕－外來系甕の検討2－」『新潟県の考古学』II 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010a 「古墳出現前夜に盛行する中山南型式の高杯について－北陸北東部固有の大型・有稜・身の浅い高杯についての一試論」『新潟県の考古学』第21号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010b 「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012a 「阿賀北における古墳時代前期の土器について（下）－細別器種毎の変遷について－」『三面川流域の考古学』第10号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012b 「古墳時代前期の身の浅い鉢－越後の事例から－」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会
- 滝沢規朗 2014 「越後・佐渡における鉄器と青銅器－伝来の系譜と性格－」『古代文化』第66卷第4号 (財) 古代学会
- 滝沢規朗 2015 「北陸北東部における屈折脚高杯の様相－越後を中心に－」『東生』第4号 東日本古墳確立期土器検討会
- 滝沢規朗 2016 「弥生・古墳時代の土器の移動－上越と北信の状況－」『地方史研究』第66卷第4号 地方史研究協議会
- 滝沢規朗 2017 「魚沼地域の弥生時代後期～古墳時代前期」『三面川流域の考古学』第15号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2019 「北陸における弥生時代後期～古墳時代前期の土器について－東の越と西の越－」『東生』第8号 東日本古墳確立期土器検討会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1994 「北陸南西部の古墳確立期の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会田嶋明人 2003 「大型建物群造営期の土器様相」『石川県万行遺跡発掘調査概報』 石川県七尾市教育委員会
- 田嶋明人 2006 「「白江式」再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』 桂書房
- 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2008 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その1）」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009a 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その2）」『石川県埋蔵文化財情報』第21号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2009b 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その3）」『石川県埋蔵文化財情報』第22号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2015 「東日本にみる9・10期の高杯」『東生』第4号 東日本古墳確立期土器検討会
- 鶴田典昭 1994 「第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14（鶴前遺跡）』 (財) 長野県埋蔵文化財センター
- 千野 浩 1989 「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』41-4
- 千野 浩 1993 「本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土器について」『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』 長野市共育委員会
- 土屋 積 1993 「長野県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 土屋 積 1998 「第6節 成果と課題」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14』 (財) 長野県埋蔵文化財センター
- 柄木英道 1991 「石川県（加賀・能登地域）の土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』 第I分冊 東海埋蔵文化財研究会
- 土橋由理子 2004 「第V章まとめ」『小野沢西遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第131集 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長井数秋 1996 「土居窯式土器」『日本土器辞典』 雄山閣
- 長岡市教育委員会 2000 『五斗田遺跡』
- 中郷村教育委員会 2000 『籠峰遺跡発掘調査報告書II－遺物編－』
- 長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財センター 1994a 『鶴前遺跡』 (財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書17
- 長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財センター 1994b 『栗林遺跡・七瀬遺跡』 (財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19

長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1997a 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 16 (篠ノ井遺跡群)』

長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター 1997b 『飯田古屋敷遺跡 玄照寺遺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 清水山窯跡 池田端窯跡 牛出古窯遺跡』 (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24

長野県埋蔵文化財センター 2004 『一般国道 18 号 (野尻バイパス) 埋葬文化財発掘調査報告書 4 川久保遺跡』

長野県考古学会 1999 『長野県弥生土器集成図録』

長野市教育委員会 2014 『浅川扇状地遺跡群 長野女子高等学校校庭遺跡』

新潟県教育委員会 1979 『下谷地遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 19 集

新潟県教育委員会 1983 『内越遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 33 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1996 『横引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 74 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1997 『大洞原 C 遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 85 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2004 『小野沢西遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 131 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005 『下馬場遺跡・細田遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 152 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006a 『金屋遺跡 II』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 155 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006b 『野中土手付遺跡・砂山道下遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 164 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006c 『馬見坂遺跡・正尺 A 遺跡・正尺 C 遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 165 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2014 『大武遺跡 II』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 249 集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2015 『余川中道遺跡 II 金屋遺跡 III』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 253 集

西川修一 1991 『関東のタタキ甕』『神奈川考古』第 25 号 神奈川考古同人会

日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『東日本における古墳出現過程の再検討』

水見市教育委員会 2000 『柳田布尾山古墳 第 1・2 次調査報告書』

平林大樹 2014 『IV 遺物』『浅川扇状地遺跡群 長野女子高等学校校庭遺跡』 長野市教育委員会

前島 阜 1993 『北陸系土器の動向』『長野県考古学会誌』第 69・70 号 長野県考古学会

三木 弘 2014 『2・3 世紀の大坂湾東岸と中部高地』『邪馬台国時代の甲・信と大和』 香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」

三ツ井朋子 1997 「4.まとめ A. 弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について」『大洞原 C 遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第 85 集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

森本幹彦 2006 『信濃北部の円形周溝墓について』『物質文化』81

山下誠一 1999 『飯田・下伊那の弥生土器』『99 シンポジウム『長野県の弥生土器編年』』 長野県考古学会弥生部会

米田敏幸 1998 『胎土観察と庄内式土器の研究』『庄内土器研究』X V 庄内土器研究会